日本書紀傳 十九巻 四

和書
一〇五二二號

五十二

内一五六八三號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (61)
函號 特 85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
宮内省図書寮文庫
内閣文庫

日本書紀傳十七 四
紙数五十ヶ
上面書

日本書紀傳十九之七
紙員五拾九張
九月三日授了 三橋孝補

内一二六八三號

皇産靈神の皇産靈を以て其神々成し出させ給ひ置
して其思兼の智慮を用ふ可く手力の業をも用ふ可
き時あるが故ゆ各其神々の功を令立給へる大御神
量々あむ見えさせ御在し坐しける斯して其出来上
りの能相整ひ成りて其謀ゆ合る即彼天地を預鎔造
せ御在し坐す皇産靈神の御功ゆあむ御在し坐け
る御事あるはや若て此は天照太神の天地の間ゆ二
無く諸神の上々して貴く高く渡らせ給ひ八百万千
万神は悉ゆ天照太神ゆ従ひ奉る可き事の定る所ゆ
して神代の久しき間ゆ取ては此御時ぞうり大ある

沿革ハ一も非ひけれバ甚と止事無りし御時ありし
うゝれ常ハ隠身れ御在し坐る大神も顕身と現ハれ
させ御在し坐て然る神議の場れ共とれ相携さハら
せ御在し坐す御事れあむ有ける斯りける歟ある御
得知ずて或者高皇産靈神者臣之長也故葬會ハ十万
神以議日神奉出石窟方也あゞ云るハ甚と悪む可き
安説あり甚
可畏くあゝ
オモヒカネノカミ

故思兼神深謀遠慮遂聚常世
カレ　フカク　オモヒ　トホク　タバカリテ　ツヒニ　アツメテ　トコヨ

之長鳴鳥使互長鳴示以手力
ノ　ナガ　ナキ　ドリヲ　セシメ　タガヒニ　ナガ　ナキのマタ　ラ　タ　ヂカラ

雄神立磐戸之側而中臣連遠
ヲノ　カミ　カタリタテ　イハ　ト　ノ　トワキニ　テ。　ナカ　トミノ　ムラジノ　トホツ

祖天児屋命忌部遠祖太玉命
オヤ　アメノ　コ　ヤノ　ミコトの　イミ　ベノトホツ　オヤ　フト　タマノ　ミコト。

掘天香山之五百箇眞坂樹而
ホリテ　アメノカグ　ヤマ　ノ　イ　ツ　マ　サカキヲ　テ。

上枝八坂瓊之五百箇御統中
カミワエニハ。懸　サカ　ニ　ノ　イ　ホ　ツ　マ　スベラヲのナカツ

枝懸八咫鏡一云眞下枝懸青
エニハトリカケ　ヤ　タ　カガミヲの　ヱタハ　イフ　マ　シモツ　エニハトリシデ　アヲ

經津鏡
ノ　フツミたの

和幣(ニギテ)和幣(ニギテ)尼枳底(ニキテ)。云(イフ)白和幣(シラニギテ)相與致(アヒトモニイタシ)

其祈禱(ソノイノリヲ)焉(キ)。

古語拾遺に爰思兼神深思遠慮議曰と有て次に雜(ヒ)の幣帛を設作る事有り次に其物既備云々と云て下に其を裝餝り奉るより始て次に其祈禱す方(サマ)を列ね終に儲備既畢具如所謀と云事見えたり此までは豫て其謝奉る支度(コヽロミヲヒ)の較略あれば其(具)如所謀とは其より以下の御祈の所是なり右の趣あれば上下に照し應せ前後に各見合せ有て甚委しきを此に右に計其可禱之方とは有あゞ〳〵其相計はる狀を挙〳〵はずして拾遺に儲備既畢具如所謀と有る件々のみ有て其儲をえれざるは故思兼神深謀遠慮と有る所に牧めて文章を甚く約〳〵れたりける者あり若て第一一書に

は故會(ニ)八十萬神於天高市(ニ)而問之時(中略)乃思而白曰宜圖造(ニ)彼神之象(ニ)而奉(ヤ)招禱也と有て此は唯其物を設作るのみを挙て御祈の事をば云ず第二一書に其支度々御祈々を合せえれども亦余りに事略なるに過て相考ふ可き所無く第三一書は唯御祈の時の大抵

を云るのこころ有けれ其調度の事をも兼たるが如くして此も亦委しうざる者あり然れば此段の首尾の宜しく整へる狀あるハ古語拾遺最宜しく次て

ハ古事記ゐ正しく條理相貫通りて聞えなりける

其文ハ次こゐ引て論つふ可し神祇本紀ゐ至りてハ彼此取合せて文を成せる者うゝ其段落を成さゞる

ゞ故ゐ又分明うゝざ備此ハ御祈の一段ゐてハ有れ

る事のこ多在りけり

ども其思兼神の思慮給へりし支度用意の較略すり

先心得ずてハ其意を書盡し難うを右の如く處こゐ

散在して各一ゐ紛る事能ハざるあり其古事記古語

拾遺の如きも唯其書のこゐてハ事行うず是を以て

今其段こを次第て更ゐ云試こゐすゝす先上ゐ引る拾

遺の爰思兼神深思遠慮議日の文ゐ次て宜令太玉神

率諸部神造和幣こを有ハ以て廣物を儲備の大綱を此

ゐ先云るあるゞ造和幣こを有ハ今本の誤あり其ハ次

ゐ令長白羽神種麻以爲青和幣古語尓伎毛 金天日鷲神略中

以作白和幣こを有すり始て文布和衣等を令織給へる

も太玉命の率給へる諸部神の作業ゐし有れゞ此ハ

和幣ゐハ有べうゝず若和幣を云あうむゐハ此下ゐ

こうハ古語尓伎毛こを云注をも置る可きゐ次ある書

和幣の下ゐ然る訓注有を以ても何れう字を誤れる

事著明くあるに有ける其下に其物既備はる天香山之五百箇眞賢木而上枝懸玉中枝懸鏡下枝懸清和幣白和幣令太玉命捧持稱讃と有ハ古事記に此種こ物者布刀玉命布刀御幣登取持而云々と有に相當ける所に て此の第三ノ一書に也其幣帛の事を云て乃使忌部首遠祖太玉命執取と見えたる是あれハ右の拾遺に造和幣と有ハ決く造幣帛を誤れるに あるに有ける然れハ首に宜令太玉神孫諸部神造幣帛と先云置て此より下に各こ持別て其幣帛を作備ふる件こを云む料に置るあれバ青和幣白和幣の如きも其幣帛の一種

ふける第二一書に忌部遠祖太玉者造幣と有る事其德歲として孝ゝ山し趣あるゝ德て幣帛を司給へるゆこり有けれ青和幣白和幣の類を作れるに あるに非り

あり此一種を以て如何ハ太玉命の職掌こハ定むるに其上其神武天皇段に令天富命孫齋部諸氏作種こ神宝鏡玉矛角木綿麻等こ見え又當此之時帝之與神其際未遠同殿共床以此存常故神物官物亦未分別宮内立藏号斎藏令斎部氏永任其職又令天富命孫供作諸氏造作大幣と有る其事の權輿是に在を以て其原を推す時ハ右の造和幣ハ造幣帛の誤ある事を曉る可くあむ有ける猶證こ存べきハ其始に太玉命孫殺知命御明玉命天目一箇命と有ハ右に謂ゆる神名日天日鷲命手置帆負命彦狭知命孝諸部神こ有る神等に御在し坐す偖其最初に造奉れる太玉命と有ハ右に謂ゆる神等に て此に供作諸氏こ見える其祖神等に御在し坐す偖其最初に造奉れる事を思ハ其疑ひ無くあるし

八　鏡と劔と日矛の三是あり第一の一書に有高皇産
靈尊之息思兼神云者有思慮之智乃思而白曰宜圖造彼
神之象而奉招禱也故即以石凝姥冶工採天香山之
金以作日矛又全剥真名鹿之皮以作天羽鞴用此奉造之
神是即紀伊国所坐日前神也と見えたる如く太神の
御象を圖造り　招禱奉るむと有る此を以て其最初
の在し御事を明らむ可きあり第三の一書の先乃使
鏡作部遠祖天糠戸者造鏡と見え第三の一書の上枝
懸以鏡作遠祖天抜戸兄己凝戸邊所作八咫鏡と有て
玉うり此を先めし古事記も右の傳と共に同トくして

思金神令思而云こと取天安河之河上之天堅石取天金
山之鐵而求鍛人天津麻羅而科伊斯許理度賣命令作
鏡と見え古語拾遺にも仍令石凝姥神天糠戸命之子
取天香山銅以鑄日像之鏡中略於是從思兼神議令石凝
姥神鑄日像之鏡初度所鑄少不合意是紀伊国日前神也次度所
鑄其狀美麗是伊勢太神也と有が如く諸説共に合ひて鏡を
造奉る事を最初に存給へる由なるい皇太神の御象
として齋奉りて其磐戸より招出し奉るむとの神議
にあるむ因れりける若て古事記に於是天照大御神以
之問天児屋命布刀玉命指出其鏡示奉天照大御神之時天照大御神逾思奇而猶自戸出而臨坐之時其所隱

ムたる此に天糠戸神の御名を脱せり其鍛人天津麻羅命を求も伊斯許理度賣命に科すると其神の同じ為て所任給ふ所なる由傳三十四十に云るが如し又

立之天手力男神取其御手引出マ見え古語拾遺ハも
尓乃太玉命以廣厚称詞啓曰吾之所棲宝鏡明麗恰如
汝命乞開戸而御覧焉云ヘ聊開戸而窺之爰令天手力
雄神引啓其扉遷座新殿マ有ハ思兼神の思慮の此ハ
至れるあリバ鏡を以て
第一義マ為る即是なり御劔を此ハ作仕奉れるハ傳
十五 二百七十 十八 三十三丁 ハも粗云るが如く此御時ハて
有けり其ハ右ハ引る古事記ハ求鍛冶天津麻羅而科
伊斯許理度賣命令作鏡マ見えたる天津麻羅ハ天目
一箇命の亦名あり此ハ合せて古語拾遺ハ令天目一
箇神作雜刀斧及鐵鈇古語拾遺マ有が此ハハ獨立て雜
刀を作給へるが如くも見ゆれども右の古事記の文
ハ依る時ハ石凝姥命の相槌マ成マせ給へるハて其

内ハも石凝姥命ハ日像之鏡マ日矛を主マ作給ひ天
目一箇命ハ御劔マ日矛ハ著べき鐵鐸マを持別けて
作給へるハが有ける偖此御劔ハ謂ゆる草薙御劔ハ
御在ーー坐す御事ハ樋川上天淵記ハ素盞嗚尊奉劔天
照大神太神日我屋天岩屋時落江州伊布貴山是我劔
也マ見えたる斯文ハて明マうあリバ此御時ハ落散
ぬひ亡なるハあむ有ける其ハ宝劔出現章の傳ハ云
を合せ讀て知べき者ありマ偖此劔ハ鏡玉マ同ト
く此ハ所見なる眞坂樹ハ懸たれーー所ある者あり其證
ハ景行天皇十二年御紀ハ神夏磯媛が聆天皇之使者
至則拔磯津山賢木以上枝柱八握劔中枝柱八恐鏡下

古語拾遺宝神天皇設ハ御巫神威同殿不安更令下斎部氏奉ル石凝姥神斎天目一箇神ヲ斎二氏更鑄鏡造劔マ有る此文ハ照シて辨ヘ山可き事あり

八岡縣主祖能鰐聞天皇車駕豫
枝取五百枝賢木
以立九尋船之舳
而上枝掛白銅鏡
中枝掛八尺瓊
下枝
掛八尺瓊又次ハ

枝柱八尺瓊云ニ又見元仲哀天皇八年御紀ハ公筑紫
伊覩縣主祖五十迹手聞天皇之行枝取五百枝賢木立手船
船之舳艫上枝掛八尺瓊中枝掛白銅鏡下枝掛十握劍
云ニとも有て上古ハ鏡劍玉を並べ掛て幣物ハ
奉れる事ハて其ハ此ハ本着を以知べし日矛ハ此ハ天鉏女命則手持茅
纏之矛と見え古語拾遺ハ手持著鐸之矛ニ有る是か
り其を日矛ニ云ハ私記ハ作戈矛之形既圖日像故加
ニ云日矛ニ見元又案事情矛之鋒付鏡圖日像之故称日
矛歟ニ見えたるが如く矛を作りて其鋒ハ鏡を付た
るが故ハ日矛ニハ云ハて瓊を著たるを天瓊戈ハ云
ハ異あ〳〵ざる可きあり又其柄ハ茅を纏裝ひた
り〳〵故ハ茅纏之矛ニ云ひ鐵鐸を著たるを以て著鐸

之矛ニハ云るハて皆一物ハして異名有あり紀国神
社録ハ引る日前大神宮社家傳記ハ日前国懸両大神
者天照太神之前御霊而神明之長上也中略神代紀一書文八十
万神以石凝姥命為治工採天香山金以磬窟戸之前而
所奉圖造之日像之鏡日矛是也社家者鏡共日矛ニ物之説異神書云ニ
ニ云る大字ハ傳記の文あり小字ハ録者の説あるが
實ハ美たき傳説ニ為ハ所思元たりける備明文拔ハ
載る大倭本記ハ天皇之始天降来之時共副護爾鏡三
面小鈴一合也註云一鏡者天照太神之御霊名天懸大
神也今伊勢国磯宮崇敬拜大神也一鏡者天照太神之

前御霊　名国懸大神今紀国名草宮祭敬拜大神也一
鏡及子鈴者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護奉
大神今卷向宍師社宮所坐拜祭大神也又有年中行
事秘抄引旧記賢所三所鏡所即云伊勢一所真形
長六寸許也　一所鏡紀伊国御神　又有一所真形長六寸許也
む謂ゆる真経津鏡ハて御食津神の御ハて伊勢国度
會宮の御模造あるが右の子鈴又云此日弟ハ著たるハも彼著鐸之弟
鐸鐸ゝ思ゆるを以て又思及おすハ已ハ此日弟ハ著
給へり弟ゝ離ち奉りて其日像の御鏡を以て御食
津神ゝ別處ハ祀祭ゝれてハ有けれども猶古名を傳

△古事記今作鏡の次ハ科玉祖金今作ハ尺匂瓊之五百津之御統麻流之珠ゝ有る是ハ此ゆい

へて日弟ゝハ申奉れるハこゝ
合意是紀伊国日前神也次度所鑄其狀美麗是伊勢大
神也ゝ云るハ唯二面の鏡の事ハて日前ハ国懸大
神伊勢あるハ天懸大神ゝ申す鏡名ハ御在し坐す事
右の大像本記ハて甚明ゝ有ハ御食津神の御ある事を考
一所真形長六寸許ゝ有ハ御食津神の御ある事を考
漏されたるゝ次不合意を古史弟四十五段ハ次天懸大
不合諸神之意ゝ云換へ又弟百三十四段ハ次天懸大
神国懸大神者幹祭木国名草宮ゝ有ハ共ハ甚ゝき誤
あるゝ上ハ其弟四十五段徵ハ御紀の日弟を甚く疑
ひて取ゝれざりしハ其著鐸之弟ゝ一ある物を別物
ハ思誤へゝれ　其次ハ八坂瓊之曲玉あり弟二ノ書天
なる者ハあむ
鏡戸神をして鏡を造ゝしゝ給へるハ次て忌部遠祖
太玉者造幣ゝ有れども其上百五十ハ云る如く此時
ハ奠らるゝ幣帛の事を摠載ゝれるあれば別ハして

拾遺ハ初度所鑄次不
備上ハ已ハ引る古語

其引續の文と云ハ玉作部遠祖豐玉者造玉と有る是
あり第三ノ書ハも上枝懸以鏡作遠祖天枝戸児已凝
戸邉所作八咫鏡中枝懸以玉作遠祖伊斯諸尊児天明
玉所作八坂瓊之曲玉と有る是ハ上枝中枝下枝と云
ふ次第ハ依る事なれバ正書ハ上枝ハ玉中枝ハ鏡と
云ふ順次も有れバ證せ為るハ足らざるが如しと云
へども其鏡ハしも皇太神の御像として仕奉る所ハ
れバ造奉る事其始ハ鏡次ハ玉と云由を以て記され
たる事一とハ其造主の名を挙たるを以て證と存べ
くあるに有ける古語拾遺ハも令梯明玉神作八坂瓊五

百箇御統玉とハ有れども青和幣白和幣文布和衣の
後ハ在れバ文う次第の錯ハれる事著明き者ハあるに
有ける其掛る次序を以て前後を云べうらざるハ本
白和幣と見え第三ノ書ハ正書拾遺共ハ下枝懸青和幣
ハハ木綿を懸たる由ある下枝是あり右件鏡玉劔日矛を
令造給へり次第あり若て此ハ下枝懸青和幣白和
幣と云事有り古語拾遺ハ鏡の次玉の前ハ在ハ錯れ
ハて実ハハ鏡玉を令せて後の事あるが令長白羽神
伊勢国麻績祖今俗衣服謂之白羽此縁也 種麻以為青和幣古語尓伎比令天日
鷲神造木綿津咋見神穀木種殖之以作白和幣是木綿也以上
二物一夜令天羽槌雄神倭文遠織文布令天棚機姫神
蕃茂也 祖也

織神衣所謂和衣古語伎多倍て見えたる是右に続く可き文なり然るに此第三の一書には下枝懸以栗国忌部遠祖天日鷲所作木綿と有て此　木綿は白和幣の事にして唯一種のみなり正書にも右に引る如くなれば其も青和幣白和幣の二種のみ有り然れども拾遺に其支度を云るに右の如く青和幣白和幣荒衣和衣の四種有る上は俱に下枝に懸たる事には有れども凡て古書は多く其主と立べき重き物一をのみて餘りを略ける者なれば右の四種共に取留たる事なども更に古語拾遺に右の四種を設作れる事を云るなり其

に對へて下に下枝懸青和幣白和幣と有を以て其然る所以を知べくなむ有ける其は上百六十一丁に云るが如く此時已に草薙御劔も出来て懸くれたる者なれば近江国伊布貴山に取落させ給ひける故にや省きて記されざるなどの類猶余れも多在る事共なり若て第二の一書には鏡玉を造らるる事有て次に又使山雷者採五百箇真坂樹八十玉籤野槌者採五百箇野薦八十玉籤と有る此五百箇真坂樹は此に中臣連遠祖天児屋命忌部遠祖太玉命掘天香山之五百箇真坂樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡一云真経津鏡下枝懸青和幣白和幣相與致其祈禱焉と見えたる此は天児屋命太玉命二神の掘給

八傳二十一（九十七）五百箇
眞坂樹八十玉籤の
下に引る舊事紀
に此の事を復合
山雷者栖天香山
之五百箇眞賢木
木に云へり有る如く
此に

へるが如くあれども古事記に此種二物者布刀玉命
布刀御幣登取持而天児屋命布刀詔戸言禱白而と有
れば太御幣と取持（捧げ）して太祝詞言禱白し給へるこゝろ
有けれ其を掘給（自）へりと云へは非れば必右の眞坂樹
八八山雷神の掘給へる　ある可き事照し見て曉る可
き者あり次に五百箇野薦は口訣に野薦者茅也と註
る奚に然る言ひて此に謂ゆる茅纏之矟あるを裝ふ
料　ある可き事云も更なり（但上に云るが如く古語拾遺に此を著鐸
之弟と云り）儲其鐸は令天目一箇神作（三）右の事共託て
雜刀（三）及鐸（三）と上に已に令せて有り
古語拾遺に令（下）手置帆負彦狭知二神以天御量（大小斤）雜器等

伐大峻小峻之材而造瑞殿（古語美豆能美阿良可）兼作御笠及矛
盾（中）と有る此（下環に云る如く）此次に令（下）天手力雄神引啓其扉遷座新殿（上）
と見えたる新宮の御事にて手置帆負彦狭知二神の
造奉る所ありと雖も山より材を伐り野より草を刈
る事は一も正しく右の山雷神野槌神二柱の御所為
にこゝろ有けゝ其は儀式大嘗祭儀に各為採大嘗宮
御殿料材　向ト食山祭山神（中略）次各為艾同殿料萱向
ト食野祭野神（下略）と有が如く材木菅草の為に山野の
神等を祭る事にて有れども其は人の世の事にて
有けれ此にては皇太神を磐戸より出し奉りて遷

奉るむ料ゐ新宮を造奉る初ゐし有ければ坂樹と野
薦との物のミを山野神ゐ令せて採しむと云事の何
ど有べきや素より宮材菅茅を令採給へりし傳あり
けめども御紀ゐ其御殿の御事ハ傳へ漏されたり
けるうち自然ゐ其事も必有りめ可き文勢あるを曉
る可し且此時の殿造の舊儀ハ朝廷ゐるハ大嘗祭儀式神廷ゐる
ハ儀式帳太神宮式ゐ遺れる皆同一儀ゐるを思合す
可くゐむ其ハ祝詞講義遷奉太神宮祝詞の下又ハ中臣壽詞講義第十段ゐ云るを
合せ考ふ可し但又第二ノ一書山雷神野槌神の傳ゐりも云むゐ儲上百一ゐも委しく論
つらへるが如く天照太神の此時の御怒の基と云ハ

保食神の御靈ゐ資て顯見蒼生の食て活べき穀物ハ
更ゐり衣服(キルモノ)住宅(スミカ)の事ゐ至る迄も悉くゐ整成給ひて
天降し幸給ハむと所思ゐし省して專其御事のミ務
切しめ世給へる御程ゐりしを素戔嗚尊其も此も妨
奉給へりしゥが御心ゐ得堪させ御在し坐ざるより
起れる事ゐし有ければ其御祈を籌て八百万神等共
ゐ天ノ蒼生等命續ぐ食物著物住家の事迄も始ゐハ勝るべうり再善成し仕奉られし事著うり然るゐ右件衣住ハ
二ハ有れども天照太神の主と所思し給へる御食物
の御事の全ゐ所見ざるハ全く傳漏されたりし者ゐ
て紀記拾遺等ゐこうハ脱たりけれ皇太神宮儀式帳

（其八後世の御神楽は皆此時の古式を擬ひたり物あるは神楽詞の葛城の末天の坐す豊岡姫のや安以曽ニ乃賀入ら鳴安とるは細刺上道と有る其賛歌人と天の坐豊岡姫神の御使人と為成せる人更あり志都彼乃ハ菅ハ天在や鶏鳴ニ寄来やゐこ有も此国土ハ成れる御食を天津御食を天が知こ又宮殿遊歌本は豊宮殿御遊結こ久方の天川原ハ豊宮殿御遊すし嬢の色する末ハ久方の天川原ハ豊宮殿御遊すし嬢の色する末ハ久有るは天河原ハ御宮を居て御食物を任奉給し　證あり始め任佐能古恵須ハ古事記遠飛鳥宮段ハ其大前ハ前宮祈年ハ打縁舞詞那傳歌儛末有る其打縁是あり又次ハ酒敬歌有も天孫と大御酒仕奉給へる由上七十丁ハ云るを以も考合すべき事あり）

建久行事記ハ更あり大殿祭詞別等ハ依る時ハ豊受大神あむ奉こせ御在し坐ける事上四十九丁ハ云るを見て知べきあり。其大神の此ハ天照太神の御饌都神として仕奉こせ給ふのことあらず想ての神樂の御事ハ立交ハこせ御在し坐し御事ハ（十九丁ハ引）る神樂採物　歌ハ幣。幣帛ハ我ハハ非ず天ハ坐豊岡姫の宮の幣帛又幣帛ハ成こまし物を皇神の御手ハ取これて馴さハおしを杖此杖ハ我ハハ非ず天ハ坐す豊岡姫の宮の杖ハ御篠此篠ハ何處の篠ぞ天ハ坐す豊岡姫の宮の御篠ぞ桙此桙ハ何處の鉾ぞ天ハ坐す豊岡姫の宮の御鉾

（体源抄五巻大神景範家記ハ載る豊入本古語拾遺ハ御琴長白羽命本方天児屋命末方太玉命人長天鈿女命と有て向於天石戸前庭火焼合採物是皆豊岡姫命座御室也と有も故有る事とぞ所思ゆるゝ）

ぞ」と有る豊岡姫を梁塵愚案抄又（源氏）河海抄等ハ天照太神ある田ハ説れたるハ誤ハて此磐戸隠ハ皇太神の殊ハ此大神を善ハこく尋させ給へるハ起れる事あるぞ故ハ此場ハ出させ御在し坐て大御心を取奉こせ給へるハ本著て（此あるも其如く豊岡姫の宮の御こと也云意ハて）古ハ謡物為これたるを以て右の御食物ぞハ猶更ありし御事を明こむ可くて荒木田末壽ぞ拆竹雜難ハ神樂ハ新嘗の祭ハ為こる事あり其新嘗ハ天照太御神を天皇の祭こせ給ふ御神事あり幣ニ帛ハ我ハ非ずと云ふ我ハ天皇の自宣ふ我あり此幣ハ我奉る幣帛ハて ハ非ず豊岡姫の宮ハ奉こせ給ふ幣帛ハ悦びて受させ給へと云意あり然るハ朝夕の御饌も此神の奉給ふあくでハ安く聞食ぬを以て思合すれハ太御神ハ奉る物ハ萬ハ豊受大神の奉給ふを太御神ハ悦ばせ給ふ因縁有

（文上五十二丁ホも云る如く神樂ハ此時ホ起りて天照太神の御祭あるれ出前張蔦形ホ矣ホ笠す豊岡姫の云に勢入ゲ鳴宇矢上る細下一ホ細刺上る」と云歌ハ其勢ヲ人の奉仕る御物ヘ豊受大神の御ある由ある也も思合すべし）

の故の事あり所以ホ此幣ハ寒ハ天皇の奉給ふあれども豊受大神の受取て奉らせ給へる意ホて如此申して太御神を悦ばせ奉給ふあり云て右の篠を一本ホハ此篠ハ何處の篠ゲ舍人等ガ腰ホ下れる鞆岡の篠ゲ有る此ハ其篠の出所を云るあれば右の豊岡姫の宮も其出所を云る事同ト意あり云て云るハ甚能も云れる説あり新年祭詞ホ故皇吾睦神涌伎命神漏弥命登皇御孫命能宇豆能幣帛ヲ称辞竟奉久登宣て有あれども其宴ハ天皇の奉らせ給ふ祈年の大幣あれども皇祖天神の事依し給へり如くして奉らせ給ふて云ふ意味あるホ異しゝず其次ホハ古語拾遺ホ其物既備掘天香山之五百箇眞賢木古語佐祢居自能祢居自而上枝懸玉中枝懸鏡下枝懸青和幣白和幣令太玉命捧持称讃亦令天児屋命祖副祈禱又令天鈿女命古語天乃於須女其神強捍猛固故以為名今俗強女謂之於須志此縁也以盍辟葛為鬘次蘿葛為手繦蘿葛者以竹

葉飲想木葉為手草今多久佐手持著鐸之矛而於石窟戸前再復誓槽古語宇氣布祢約誓之意擧庭燎功作俳優相與歌舞中略儲備既畢具如所謀て見元なる首ホ其物既備ハ上ホ宜令太玉神率諸部神造幣帛上と有し幣帛の事の成竟れるを云あり下ホ儲備既畢具如所謀て有ハ其諸部神をして造ゝしめたりし幣帛を五百箇眞賢木ホ取餝ゝひ太玉命太幣帛て取捧げて天児屋命太詔刀言禱白す事の較略ホして凡て此ある神事の作法あるホて具如所謀て云ハ其始ホ高皇産霊神會八十万神於天八湍河原議奉謝之方爰思兼神深思遠慮議曰云て

有し其結あるゆて是まで思兼神の深く遠く思慮ゆ
得させ給へる所是あれば右の令（シメム）某神云々云ふ令
字ハ志米年ゆて將ゆ然令爲むと云義ゆて其如所謀
々云る元即今（既ゆ）然令爲る所あるを思ふ可くあゑ有け
る此ゆ故思兼神深謀遠慮遂聚常世之長鳴鳥使互長
鳴云々有ハ右の如く般落を成さずして今既ゆ
然使爲る所へ移れる文あり唯第二一書ゆ此諸物
皆未聚時中臣遠祖云々有のミゝ右の拾遺ゆ儲備
既畢具如所謀云々ゆ全く右件ハ思兼神の思測ゆ奉
同し意味ゆ有ける
る所の如し如此して御ト合の御事を愈其謀る所の（思金神令思而云々）
如くして被定たる御事と見えたり古事記ゆ右の幣
帛を令作給ふ事の條に有て其物の既備ハれる所ゆ

召天児屋命布刀玉命而内抜天香山之眞男鹿之肩抜
而取天香山之天波迦而令占合麻迦那波而天香山
之五百津眞賢木矢根許士尓許士而於上枝云て於中
枝云て於下枝云て而此種に物者布刀玉命布刀御幣
登取持而天児屋命布刀詔戸言禱白而（下略）と見えたる
是まで思兼神の思慮給へる所あり此ゆ右の儲
備既畢具如所謀と有し事を今般ハ御トを以て其謀
奉れる趣皇太神の大御心ゆ恐ハさせ御在し坐て其
御怒を解せさせ給ひて磐戸を出させ給ふや否ずず
やと問奉るゝと所ゆて有あり和歌童蒙抄ゆ古語

拾遺云として天照太神天磐戸を打塞ぎて天石窟に隠り居坐し時に思兼神深く謀り遠く慮りて天香来山の鹿を生ころし捕へて其肩を抜て鹿をば放遣りて天香山の朱櫻木を根掘じに掘て其骨を焼て太神の出坐む事をトなふ御ト謀に合ひて磐戸を押開き出坐き役思兼神は今の卜部氏の遠祖也と見えたる是なり此説拾遺の今傳いる諸本に所見すと雖も當昔然る本も有しなり けり其神を祭るに御トを以て

ハ神武天皇御紀に是夜自祈而寢夢有天神訓之曰宜取天香山社中土以造天平瓮八十枚并造厳瓮而敬祭天神地祇て有る此ハ正しく神の御諭に依て祭らせ給ふあるに天皇の様にて御祈為させ給へる御事の

云こと然後ト祭祀神吉兆便別祭八十萬群神仍定天社国社及神地神戸

御在し坐るも御トに依て定めさせ給へる異なるず又崇神天皇七年御紀に乃ト使物部連祖伊香色雄為神班物者吉之又ト便祭祀神不吉と見え無仁天皇二十七年御紀に令祠官ト兵器為神幣吉之と見えたるあるを始めて神に幣帛を被奉るこれ先御ト有て後に定めさせ給ふ古の例なり右の如く思兼神の深謀遠慮を以て云この謀を成して祈禱奉らむと議り偖後に其謀る所を以てトふ事上件の如くあるに思兼神の謀る所と御トて打合て悉く叶たりしかば此より其謀る所の如くして磐戸の前に將行て宴の御祈禱に取掛りて行ふ所あるを此御紀に甚く事略られて唯其場の事のみを記されなり此に遂聚常世之長鳴鳥使互長鳴亦以手力雄神立磐戸

之側而中臣連遠祖天児屋命忌部遠祖太玉命掘天香山之五百箇眞坂樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡一云眞経津鏡下枝懸青和幣和幣此云尼枳底白和幣相與致其祈禱焉下略〻見えたる即其御祈禱の較略なれバ上件これ云る如く各其依来る所以を知ずして八雜ふ可うゝざる事共多在り今其心して見る可く

あゝ有ける又下百十下れ記し継て云うし故拾遺れ儲備既畢具如所謀〻有れ続きて此〻同じ所れ以広厚称詞啓曰吾之所奉宝鏡明麗恰如汝命乞開戸而御覧焉仍太玉命天児屋命共致其祈禱焉〻見えたり然れども右れ引る和歌童蒙抄れ引る御トの事今本れ脱たるハ可惜しき事あり古史第五十二段徴れ紀此傳れ古語拾遺〻云るハ誤あり決めて偽名日本紀

△神代本紀れハ天思兼命天降信濃国阿智祝部等祖〻有を天神本紀れハ天表春命意思兼神子信乃阿智祝部等祖〻見え又天下春命ハ意思兼神児武蔵秩父国造等祖〻見えなるを

の傳あるべき由れ云れたれども然らずハ○思兼神ハ古事記御天降段れ常世思金神〻見え国造本紀れハ（知二夫国造瑞離朝御世）ハ意思金命〻出（于世稱知二天孫命定賜国造拝祠大神）たり此をト部兼盆記れハ天ハ意思金神〻見元類聚神祇本源れハ天ハ意命〻有り右の如く亦名を常世ハ意思兼神天ハ意思金神又天思兼神又神名式れ信濃国伊那郡阿智神社武蔵国秩父郡秩父神社〻有る是あり右れ拝祠大神〻云るハ其秩父神社を幷祠を云あり高橋氏文れ知二天国造上祖天上腹天下腹人等〻有ハ景行天皇御世の人あり右の天表春命天下春命の名れ同じきハ祖神の名を襲へるれや名義ハ此れ深謀遠慮〻見元古語拾遺れ思兼神深思遠慮〻見えたるを篁疏れ思兼神者思慮兼人故為名深遠釋兼字義謀慮釈思字義〻説せ給へるれ乙明

亮あり古事記に思兼神令思而〻有り記傳八二十ゥ二丁ゥ
此の第一の一書に有高皇産靈之息思兼神云者有思慮
之智乃思而白曰〻有を引て思ハ万葉三二十八丁ゥ歌思
辞思為師〻有る思ゥて思慮あり金ハ兼ゥて數人の
思慮る智を一の心に兼持る意あり」〻見えたるも右
の意を含まれたる説あり猶天孫降臨章第一の一書ゥ
も故天照太神乃召思兼神問其不来之狀時思兼神
思而告曰宜旦遣雉問之於是從役神謀〻見え古事記
同段ゥも尓高御産巣日神天照大御神之命以於天安
河之河原神集八百萬神集而思金神令思而詔〻有よ

り以下悉ゥ其神の白す所を以定め給へるハ思慮の
智御在し坐す神ゥ坐せバあり備兼ハ兼官を加祁豆
加佐〻訓る其兼の義をも包ねたり万葉一八丁ゥ家在妹
字懸而小竹樋二三十五丁ゥ玉手次懸而將偲八二十丁玉手
次不懸時無氣緒尓吾念公者又五十一丁妹字懸管不意日
者無九二十九丁ゥ留有吾字懸而小竹葉背又三十一丁珠手次
不懸時無口不息吾意兒十二七丁玉手次不懸將忘言畫
欲又三十六丁目頬志久懸不思月毛日毛無十三二十八丁珠手
次懸而所偲又珠手次懸而思名十五三十六丁ゥ麻蘓可我
美可氣豆之奴敝等ゥの懸ゥ同じく此物より彼事

ゥ三五丁ゥ懸而之
努櫂日本島根乎
四十丁ゥ吾聞尓繫
莫言川蔦之乱而
念

（孟子の問、公思兼三主を見の其書は遥の後の渡来し者あれば偶の然るあり）

の亘りを加久流てハ云あり中昔の歌詞の多く思ひ懸無きあるも云事あり然れば此の神名の思兼（オモヒカネ）も一神の一して衆神の思測る處を懸たる御功の依れる言ありけり又伊勢物語の昔武蔵なる男京なる女の許の云に京なりし武蔵鐙然すがの懸て頻むの問ぬも怨（ツラ）しと問ふも煩さしと見え又妾を加祁賣てと云ひ御所又ハ御合又ハ御向あで云ふ加祁も皆右の同じく御て兼て大抵相近き語ありム偖右の引る古事記の常世思金神て申す御名の常世ハ此の云る常世之長鳴鳥て云も今如此世中ハ常夜往ける間の長鳴為しめたる由の名あるの等しく此思兼神ハ一も其常世往ける時節の始より終迄の悉くの謀りて天照太神を招禱奉

（右の引る如く天思兼命又ハ天八意思兼神又ハ天八意命あで天の言を冠ふて世奉るを以て天神の御在し等す事決き者あり）

る事の一ハ主て（立て思慮り）御在し坐ける神（の謂）の一て此時の萬の物も事も此神の思慮の出ざる事無が故の御名の上の然冠ふて称申せる者あり（記傳八巻の此を常世国の事て一の思混ふるハ誤あり）て云れたる実の然る言あり又神名式の河内国大縣郡常世岐姫神社て有る常世ハ黄泉国の事の一して岐神ハ其黄泉戸の塞りて防遏め御在し坐す意の御名ある由傳十巻二百（二）十三丁（九）十二巻六十（七）九十の云り此て混ふ可うざるあり又八意思兼神天八意命あで申す八意（の八）ハ應神天皇御紀大鵠鶴尊御歌の阿餓許居呂辞伊夜千古珥辞呂て伊夜の釈の彌て有る字の義あるあり万葉十三（十六）の物部乃八十乃心呼天地二念足橋玉相者君未益八跡て有ハ其御名の義を釈が如

き歌のあむ有ける其ハ此のハ十乃心と云ハハ意と
云ハ同じく其實ハ一人の心のてハ有れども八十人
の心とあるが如く種々の思慮る所多きを云ひ天地
二念足橋とハ此の謂ゆる深謀遠慮のて其思の行届
くを云て上の説る思兼是あり玉相者ハ八十の心の
天地の思足ハし行至れるが本の我一心の裏あり相合て其
思ふ所を得るを云なれば古語拾遺の儲備既畢具如
所謀て有る所のあむ當れりける然れば八意とハ弥
意のて八百萬千萬神の心をも唯一神のて統るが如
き意の御名ある事第二の書の故會八十萬神於天高

市而問之時中略思兼神云者有思慮之智乃思白而白曰て
有を以て八意の弥ハ唯物の弥重ある意の常のを云と
ハ甚だ異のして限も無く廣く大ある事を知べきな
り偖次の出たる天児屋命も此思兼神と同神の御在
し坐が其児屋ハ借字のして意弥の義あるあれば八
意を倒のを云る神名ある事其傳のを見て知べきな
り猶神代本紀の天八百日尊と有ハ天八百意と申す
義又天八十萬魂尊と有ハ字の如くのて共の同じ
例の御名あるハ若くハ此亦名の混れあるむも知べ
うざるあり素問上古天眞論の去世離俗積精全神
游行天地之間視聽八荒之外と有る註の神全故也康
桑楚曰神全之人不慮而通不謀而當精照無外志凝宇
宙若天地然又曰体合於心心合於氣氣合於神神合於
無其有分然之有唯然之音虽遠際八荒之外近在眉睫

之内来於我者吾必盡知之夫如是者神全故所以能矣
々見えたるが如く神全くして天地ゐ念足いす神德
ゐ御在し坐を以て八意思兼神々ハ申せるあり偖此思兼神の出自を此第二
一書ゐ有高皇産靈尊之息思兼神云者々有ハ更あり古事
記ゐも高御産巣日神之子思金神々見え神代本紀ゐ
も高皇産靈尊児天思兼命次天太玉命次天忍日命等
の神名出たれども古語拾遺ゐハ其高皇産靈神所生
之女名曰栲幡千々姫命其男名曰天忍日命又男名曰
天太玉命々有て思兼神の御名御在し坐ざるハ其誤
あるを知て省れたる者ゐこそ有けめ若て其始神皇
産靈神の下ゐ是皇親神留弥命此神子天児屋命即中

臣朝臣祖也々云る此も誤あるゐハ有れども其出自
の異あるより斯る相違も出来れるゐハ非ト云然る
ハ拾遺の例々して　下ゐ事実を云むとしていハ上ゐ
其神の父祖を挙る例あるゐ不意き状ゐ天石窟條ゐ
至りて爰思兼神深思遠慮議曰々云る事他の例々も
異あれバ思兼神天児屋命同神あるを知ての所為ゐ
る可く所思ゆるあり偖其段の太玉命以下ハ思兼神
の謀ゐ従ハれたる神あれバ紀記々共ゐ天児屋命太
玉命々云ふ次第ゐ在べきを今太玉命棒持称讃亦令
天児屋命相共祈禱々云るハ彼神の主々有る切ハ深

※又体源抄五巻中載たる異本古語拾遺ハ姜思兼神深思遠慮議曰云々と有て終に其思兼神者日明神也云々と有を以ても天日ハ屋命と同神なる事著明

思遠慮の事ハ在が故なり右百七十九ページ引る和歌童蒙抄載に引る古語拾遺異本に彼思兼神ハ今の卜部氏の遠祖也と有を合せて知べし又異本に天地剖判之初天中所生之神曰天御中主神其子有三男長高皇産霊神次津速産霊神次神皇産霊神と有る其津速産霊神の下に是為皇親神留弥尊即中臣朝臣祖也と云るハ甚誤れる事共にて先此三神を三男と云ちがひ言に絶たる僻事にして高皇産霊神と神皇産霊神二柱ハ御夫婦の御間に御在し坐て謂ゆる神漏岐神漏美命に渡らせ給へるを其中間に津速産霊神を校て神留弥尊と云るあやまりハ云に足ざる僻事にい有れども其を中臣朝臣祖也と云る傳のこハ取べき事なるあり其思兼神天児屋命同神と定めたるハ平田伴ニ羽の師説に出たる事あり其ハ古事記御天降段に尓天児屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命等五伴緒矣支加而天降也於是副賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝剱亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者専為我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事為政此二柱神者拜祭佐久久斯侶伊須受能宮下略と有を記傳十五二十六丁に此常世思金神手力男神天石門別神三柱神ハ其現御身を天降し給ふにハ非ず現御身ハ高天原に留りて天照太御神に仕奉給ひ皆其御霊実を天降し給ふなり故上の五伴緒神と同列に挙ずして三種御宝の次に連ねたり然れば此三柱神の御霊実共ハ鏡に在れ剱に在れ何に在れ彼ハ思

鏡ハ添ハ従へて降し給ふあり又彼五伴緒神ハ現御身あるる故ハ此次ハ某氏之祖と注したるを此三柱ハ御霊体ある故ハ子孫をバ云ず唯其鎮坐す處を注せり此等を以て現身と御霊との差別有る事を暁る可し」と云れたるハ就て古史第百三十三段徵ハ此神等其御霊ハ御霊宴として降し給へるを其現身をも降し給ひ又現身を降し給へる神等も其御霊をも降し給へるあり其ハ右の常世思金神の下と次思金神者と有る神者の間ハ布カ玉命の御霊の名を漏し為政此二柱神者と有る政此の間ハ故字を脱して此二柱

神とハ思金神と布カ玉命とを云るあり（中略）其ハ思金神天児屋命一神ハして舊ハ太玉命と共ハ太御神の相殿ハ坐たりし由ハ天孫降臨章第二一書ハ是時天照太神手持宝鏡授天忍穂耳尊而祝之曰吾児視此宝鏡當猶視吾可與同牀共殿以為斎鏡復勅天児屋命太玉命惟尓二神亦同侍殿内善為防護と有と右ハ擧たる古事記と全同じ趣ハて互ハ聊傳漏たる事の有のみあり其ハ書紀ハ視此宝鏡當猶視吾と有ハ古事記ハ此之鏡者專為我御魂而如拜吾前伊都岐奉と有と全く同じくして古事記ハ可與同床共殿と云語

を漏せり又天児屋命太玉命に勅給へる御言に同侍殿内善為防護と有に古事記に思金神者取持前事為政と有と文に精麁の違こそ有れ全同じきを書紀に も此二柱神者拜祭五十鈴宮と云文の有べきに其を漏したり其に上に勅天児屋命太玉命惟尓二神亦と有を以知べし偖如此照し合せ見て古事記に亦常世思金神の下と次思金神者と有る神者の間に布刀玉命の御璽の名を脱し政此の間に故字を脱したりとはあり偖思金神児屋命一神ありと云故に此の傳の古事記書紀符合て全一神と通ゆるに就て猶深く考るに先宝鏡開始章第三一書に思兼神の名に無く其正書一書共又古事記にも思兼神の為つる謀事を摠て天児屋命の為つる趣あるに同神なる可く所思なるに和歌童蒙抄に思兼神をト部氏の遠祖也と有に依て竟して一神なりけりと思定めたり」と云わなるに實に然る言に有ける偖此天児屋命太玉命二神に現御身にて天降り給へるに更に御璽実を降し給へる事に又常世思金神大玉神の御璽実にも其時の御物なり又常世思金神大に其宵鏡に此磐戸隠の時の御物を以て定られて此に其宵鏡に属奉らせ給へるなる事其神の御名の上に常世と冠ふらせたるに右に註せるが如く常夜往し時に太じき功有る神に坐せばなり若て其現御身の方に皇御孫尊の陪従として天降し奉らせ給へるなるか其宵鏡を可与同床共殿以為宵鏡と有が如

く皇太神皇御孫尊共に同大殿の内に並び御在し坐
しうば其事を相兼て惟尔二神尔同侍殿内善為防護
と詔給へるあり若て古事記に此二柱神者祭伊須
受能宮と有ハ崇神天皇御世より齊鏡に属て出し奉
れるより垂仁天皇御世に五十鈴宮に鎮り御在し
坐ける事のこに就て記されたるに後に雄略天皇
御世より度會宮に移し奉る偖又古事記に召天児屋
れし御事を漏せる傳あるのり
命布刀玉命而内侍天香山之真男鹿之肩抜而取天香
山之天波々迦而令占合麻迦那波而略と有を上百七十丁
に引る和歌童蒙抄なる異本古語拾遺に思兼神の
御事と為たるも天児屋命とハ同神なりける正しき
證なるに上田百樹説に国造本紀に知々夫国造八意
思金命十世孫知二夫彦命定賜国造祭祠大神と有る

（瑞籬朝御世）

大神とハ思金命を申せるにて神名式に武蔵国秩父
郡秩父神社是なり万葉十四ノ七武蔵国歌に武蔵野尔
宇良敝可多也伎麻左　氏尔毛乃良奴伎美我名宇良
尔低尔家里と見え其外此役由有る事聞えて東国に
古きト法の傳ハるに由有げなり袖中抄師時卿
歌に思ひ加祢亀の益荒の事問へば多米合なりと聞
ゞ嬉しきと詠れしハ意の思に堪難る由を神名の思
兼に係て詠れたると聞えて此も由有げなり」と云る
ハ然る言にて右の東国に由有る事ハ先神名式に同
国多磨郡大麻止乃豆乃天神社有ハ大和国十市郡天

香山坐櫛真命神社（大月次新嘗元名大麻等乃知神）と有る神わて其
ハ左京二條坐神社二座（並月次相嘗新嘗）太詔戸命神久慈真
智命神と有が其ハ四時祭式わト庭神祭二座と有る
是あり又知名抜郷名わ武蔵国豊島郡（古方宇良加太）と有
わ後の風土記わ石方神社見えたるを神体ハ鹿肩骨
を焼たる物ありと云ひ（同式ある）常陸国鹿島神宮（鹿島郡名神大月次新嘗）ハ武甕槌命
経津主命天児屋命三神を祀れるわ風土記わ神社周
匝ト氏居所と云ひ又同式上野国甘楽郡貫前神社（名神）
大ハ経津主命わ御在し坐を古より傳へて鹿の肩骨
を灼てトふ事有りと云るあど實わ東国わハ古さト

事の遺れる證わあむ有ける鹿ト起源わ久志真智産
霊命太祝詞命（天児屋命別号也）と有も思合す可く又天孫降
臨章第二ノ一書わ且天児屋命主神事之宗源者也故俾
以太占之ト事而奉仕焉と有わ合せ考ふ可くあむ有
ける偖右の百樹説ハ古史徴わ伴信友云て引れな
りしるあれども其正ト考の元書ハ彼人の手わ成たる
者あるを信友が竊したるが悪くて今取返しなる
ハ彼主の霊を慰めむとての事なり偖右の秩父神
社ハ国造本紀わ依わ崇神天皇御世わ知こ夫彦命の
其祖ハ意思金命を拝祠る所あるむが其七年御紀わ
仍別祭ハ八十萬群神仍定天社国社及神地神戸と見え
たれば其御世わ任国わ移住へる程わ拝祠られり
しある可し又右の大麻等乃豆乃天神社ハ後の風土
記わ所祭大己貴命也安閑天皇乙卯始奠官社花時以土
花祭之新稲之時以新稲祭之と見え占方神社ハ式外
なるが風土記わ豊島郡石方或浦方石方神社瑞齋別

天皇六年所祭也大物主命也と有が如く一ハ大已貴命一ハ大物主命ゐしてト事ゐ由無き神等あれば右の風土記の傳ハ誤めきて聞ゆれども然るず右の神等の御事をト問ふゐ始めて其ト庭神を祀初たる玉々見る時ハ其ト庭神ゐ合せてト問ふ所の神を大已貴命ゐ在れ大物主命ゐ在れ其ゐ一ゐ拜祠れりし者と有玉見えなりける故其常世思金神の御事ゐ就て古史徴の右の続きの下ゐ偖右の神勅の如く甚上代ゐハ天児屋命太玉命を太御神宮の相殿ゐ拜祭り給へりしゐ

二柱

拜

り其ハ倭姫命世記ゐ天照太神一座御璽形八咫鏡坐相殿神二座左天児屋命と記して別ゐ御戸開闢神二座天手力男神拷幡千々姫命と有る以て知べし然るを後ゐ豊受宮の相殿ゐ遷され給へり御鎮坐本記ゐ

外宮御鎮座の御事を記さる所ゐ依天照太神御託宣太神常一様神多賀宮奉傍止由氣宮也亦天照太神相殿座神二前止由氣宮相殿神皇孫命亦奉陪従留故号止由氣宮相殿而東西座給東天皇孫命一座西天児屋根命太玉命西相殿並坐給也自尓以来以天手力男神万幡豊秋津姫命天照皇太神乃為相殿神元是号御戸開神と有り然れば豊受神の丹波ゐ坐し間ハ皇御孫命のミ相殿ゐ坐しを雄略天皇の御代ゐ外宮ゐ令鎮坐給へる時ゐ太御神の御託宣ゐ依て常丁様神多賀宮神をバ豊受神ゐ天児屋命太玉命をバ皇御孫命ゐ傍奉られしより豊受宮の相殿と成

せ

せ

給へる有り故此思集めて児屋根命思金神同神なる事を曉る可し」（採要云）わたるハ実ハ然る言ハ有ける　其ハ世記の皇太神宮條ハ相殿神二座左天児屋命右太玉命と有ハ実ハ雄略天皇御世迄の有様有り其御世より相殿神と成換らせ給へる御戸開神ハ古事記ハ次手カ男神者坐佐那縣也と見えたるハて神名式ハ伊勢国多気郡佐那神社二座と出たるハ是有り但右の古史徴ハ豊受神の丹波ハ坐し間ハ皇御孫命のミ相殿ハ坐しを之と有ハ如何有む外宮儀式帳ハも朝夕の大御饌の御事ハ依て我御饌都神等由氣大神守我許欲止誨覚奉支てとろハ然れども東鑑治尊の御事ハ見えさせ給ハざるあり有けれ皇御孫尊以降千百余歳皇兼五年三月六日條ハ天照太神鎮坐以降千百余歳皇御孫垂跡之後六百余年と見えたれハ其項豊受大神の相殿と成しせさせ御在し坐けるあり其ハ就て皇太神の大宮ハ素より相殿と御在し坐し皇御孫尊ハ屈奉りて天児屋命太玉命共ハ陪従へる者ありけり共ハ豊受宮の相殿ハ成し奉らせ給へる

然れハ垂仁天皇御世より雄略天皇御世迄の狀五ヤ鈴宮ハハ皇太神を中として左ハ皇御孫尊右ハ天児屋命太玉命二柱御在し坐けるハて彼天孫降臨章第二一書ハ天照太神子持宝鏡授天忍穂耳尊而祝之曰吾児視此宝鏡當猶視吾可與同床共殿以為斎鏡後勅天児屋命太玉命惟尔二神亦同侍殿内善為防護と見えたる如く上古より崇神天皇御世ハ至る間の皇大宮の御消息ハ異あらざりし者あり又此大命ハ始て天忍穂耳尊ハ事依り瓊々杵尊へ傳進らせ給へるあれば今豊受大神の相殿ハ御在し坐る皇御孫尊ハしも天忍穂耳尊瓊々杵尊より始奉りて彼天津日嗣の瑞穂の御事ハ就て祀奉らせ給へりるハころ有べうめれ太神宮式ハ元日諸宮祝宜内人等各奉拜神宮云ニ記皆會集御厨太神宮司幸諸宮祝宜内人及神郡司等遥拜諸宮先拜度會宮次太神宮次諸宮訖即朝拜と有が如く神宮の拜訖て現人神を拜奉る常典なるハも心を潜めて思ふ可くあむ有けるを委しくハ傳三十二巻ハ註す可し　猶思兼神児屋命惟ハ一神と云證

傳世二十五頁ノ注ノ如ク

ある也其餘ハも所見たりける天孫降臨章第一ノ一書ハ
以思兼神妹萬幡豊秋津姫命配正哉吾勝ニ速日天忍
穂耳尊為妃と有を其第七一書ハ高皇産霊尊児萬幡
姫児玉依姫命此神為天忍骨尊妃と見えたれハ古史
第三十七段徴ハ論ハ[illegible]たる如く天忍穂耳尊の后神
と成給へるハ其萬幡豊秋津姫命の御児玉依姫命ハ
坐り右ハ思兼神妹と有れハ玉依姫命の御父ハ思兼
神ハして即天児屋命の御事ハ其ハ神名式ハ大和
国添上郡春日祭神四座並名神大月次新嘗と有を祝詞ハ鹿島
坐健御賀豆智命香取坐伊波比主命枚岡坐天之子八

根命比賣神四柱ハ皇神等と見えて比賣神ハ天児屋
命の后神と通えたるハ神名秘書ハ天照太神相殿之
姫神拷幡千ニ姫命於春日者第四神殿坐也と有る此
ハて右の思兼神妹萬幡豊秋津姫命と有ハ合るを思
ふ可ハり備春夜神記ハ天児屋命津国島下郡壽久山
天降坐と有ハ神名式ハ摂津国島下郡須久ニ神社ニ
座歟と見えたるも后神と合せて二座と聞えたり然
るハ遠江国土記ハ数智郡岐佐岡神社俗号岡猪垣所
祭天児屋根命大宮比咩命也と所見たる大宮比咩命ハ
天鈿女命の亦名ハり備倭姫命世記を始として神宮

四百八十三丁
五百十八丁
百九十二丁又
以下四百五十七丁ゆも
云るゞ如く

の諸書ゐ天手力男神拷幡千ニ姫命ゝ二柱を御戸開
神ゝい有れども紀記拾遺共ゐ次うも千ニ姫命の事
跡の見えずして唯其手力雄神ゝ天鈿女命のミ有ゐ
就て深く考るゐ決く其拷幡千ニ姫命天鈿女命一神
あるゞ彼衣織の事ゐ就てい拷幡千ニ姫命ゝ申し古
語拾遺ゐ見えたるゞ如く日神を磐戸より出し奉り
新殿ゐ移し奉り其御前ゐ侍給ふを以て大宮比咩命
ゝ申別なるゞ故ゐ各別神の如見え給へるゐい有れ
ども實ハ一神ゐして天児屋命の后神ゝ御在し坐て
妖神ハ本系帳ゐ謂ゆる高天原初而皇神之御中皇御

八て後世の中務省に納言侍従などの職掌ゐて御在し坐し

孫之御中執持伊賀志鉾不須本来中良布留人称之中臣ゝ有る如く下二百ゐ云るゞ如く若ゝ臣ゝの中執持給ふ職掌を以て仕奉給ひ大宮比咩命ハ古語拾遺ゐ如今世内侍善言美詞和君臣間令宸襟悦懌也ゝ見えたる如く表方ゝ裡方ゝゐ相別れて共ゐ同下狀ある職ゐ仕奉給へり しあり けり此一條實ゐ思兼神児屋命同一神ゐ御在し坐す御事を殊ゐ明らむるゐ足れる所ある者ありゝし 但古語拾遺ゐ其ハを大宮賣神ゝ有ハ誤あり上六十八丁ゐ以下ゐ云るゞ如く大殿祭詞ゐも見えたる大宮賣神ゝ申せるゐ豊受大神ゐ御在し坐て其ハ大宮群神の義ゐり此ゐ大宮比咩命ゝ有ハ即天鈿女命の亦名ゐして其ハ日大神の大宮ゐ侍らひ仕奉給ふ義ゐして別ある を右の如く拾遺ゐ大宮賣神ゝ有を誤ゝい云ゐり猶春日神社の妻しき所以ハ己

△此字皇行天皇四十年御紀ニ顧深謀遠慮擬文伺愛ト云ヘル被用タリ

△又竹根深毛所思鴨

春日祭詞講義ニ註シ又大宮賣神　又大宮比咩命ノ差別ハ大殿祭詞ノ下ニ云リ　○深謀遠慮（フカクオモヒトホクオモハカル）

△古語拾遺ニハ深思遠慮ト有リ此ハ上ニ計其可禱之方ト有ル計ノ猶更ニ委曲ニ云フ所アレドモ此ハ字ノ任ニテハ餘リニ漢めウしウリつれバ古語拾遺ノ如ク訓ムアルベキ良ハしウる可き備其深思ト云ヒ宝劔出現章第六ノ一書ニ蓋有幽深之致焉ト有ル幽深き致ヲ思慮ルヲ云ヘリ　万葉二十九ニ深海松乃深目手思賜七三十八丁ニ心深目手吾念有良武十一八丁ニ従海益深念ヘ十三二十二丁ニ深海松乃深目師吾子又深海松之深目思子等遠十六十一丁ニ猪名川之奥子深目而吾念有来ムアル

有ル此等ハ深謀深思ノ謂ナリ　ざれども思ノ深きを云ヘルアリ　上百七十四丁ニ引ル万葉十三ニ物部乃八十乃心吟天地二念足橋玉相者ト有ルアリ　此ノ深謀遠慮ニ當ル有リ　備通證ニ深謀遠慮四字出賈誼過秦論ト有ル　如ク然ル熟字ハ取ラレタルアレドモ　何ニモ此方ノ言語ノ狀ナラざれハ謀ハ名義抄ニ波加流又波加理事ト有ル字アレドモ思ト訓テ有ル可シ　此四字ハ深久遠久思慮ト訓ベキ所アレドモ今ハ字ノ任テ訓附ル遠慮ハ万葉四二十五丁ニ天雲乃遠隔乃極遠鶏跡叢情志行者意流物可聞ト有ガ如ク心ノ遠ク行至リテ謀成ヲ云アリ又遠ト通ト言相通ヘリ十一三十三丁ニ遠（古遠）心者不思鴨十七三十三丁ニ安之比奇能夜麻伎弊奈里底等保家騰母許已呂之遊氣婆ト有ガ思ハ云ざれ

〈豊葦原記上巻今時深智〉神功皇后〈測〉有る測字を〈然訓り〉

ぞも心と云て即思の事なるあり猶遠と云ざれども天雲乃曽久敬能拯天地乃至流左右二と有も右の引る四巻の例の如く思の遠く及ぶを云あり此類猶有ぬ可し慮ハ此あるも右の引る古語拾遺〈三第二書の思慮の慮を〉然訓付れあるも共の多婆加理比と訓り延喜六年日本紀竟宴阿保経覧歌の於蒙飛加祢多波加利許度孝勢佐利勢波安萬能伊波度波飛羅氣佐良萬事と有れば古き訓と通えたり〈言義〉ハ手量ある可し波加流の議字を用ふる事あれども古語拾遺の天御量の下の大小竹雑器等と注せる如く物の度を量るの起れる言を借て議字の訓とハ成せるあり備又神武天皇御紀の是謂〈来目歌今〉樂府奏

〈傳二十巻三十六丁の〉云り

此歌者猶有〈手〉量大小及音色之巨細〈と〉有る手量ハ拾遺の伸〈手〉歌舞と有る手の屈伸の度を云るあり此の如るも右の同ト く何神をして何物を令造玉某神をして某事を令成むと手以て物の度を量るが如く謀り較略(アラミ)て授るを云故の言義を手量あるゝ玉とハ云あり名義抄の慮を波加流又於毋波加流又於毋布又志流又比呂志又宇良於毋布と有り其宇良於毋布ハ情懸(ココロカケ)の字書の思有〈所〉圖曰慮と云りハ ○常世之長鳴鳥の常世ハ上百七十四丁の常世思金神の所の説たる如く世ハ借字の常夜往の常夜なるあり下の豊葦原中国必為(ユカム)長夜(トコヨ)と有る長夜(トコヨ)此の同ト き事其傳の引合せて暁

る可きあり口訣ハ常世之長鳴鳥雞也と有が如し記
傳八二十三丁ハ長鳴とハ化て雞ハ他鳥よりも鳴声の勝
れて長き物なる故ハ云なり」と見えたり偖古事記ハ
千承神の御歌ハ尓波都登理迦祁波那久宇礼多久母
那久那留登理加許能登理母宇知夜米許世泥と詠せ
給へるハ（雞の鳴ハ就て夜の）曙る間近く成るを所知着し歎うせ給へ
る（ハ御事問の御時あれハ）なり又継体天皇七年御紀皇太子の御歌ハ伊播都
等喇柯誓播儺倶儺喇（中略）阿閦伊啓利倭蟻慕と有も右
と同じ意味なるが其ハ如く明る空を待着て鳴鳥なる
を以て此ハ令鳴ると思ハゞ其趣違ふ可し此ハ諸神

傳三十九頁ハ丁ハ表
〜く注すすー

共ハ日神を唯一向ハ祷奉るゝと祈奉るより外無
りける（時の事なる）を以て思ふハ雞の性として夜半打過る程よ
り打続けて長鳴する事ハ明る光を待詫て鳴渡る物
なりけるハ（偖此）神ハ更ハも云ず世中ハ在て（有ゆる物皆共ハ）日神の大
御光を待詫奉ると（共ハ雞ハと）長鳴せし（あと恐奉るゝ為ハ）を聞着しめ奉るゝと
なり此即思兼神の思慮の至る所なる可きなり然
ずハ何の為とて長鳴鳥ハ然ハ集へて令鳴むや此国
土ハ天地と夜中より雞の鳴騒ぐ事も有けれ日神の
常在ハ御照し御在し坐す天国ハして独纂疏ハ思兼
神以為日之不出由夜之未明也故聚鳥使鳴告東方已
明然則日必出矣蓋表哀慕計畫伎窮非以神為函關之
更と有る御説の如き事の有むや甚と誤給へりと
云べし偖通證ハ漢書長鳴雞師古註鳴声長者也西京
雜記曰成帝時交趾越嶲国献長鳴雞以刻漏驗之典略

△或人云く長鳴鳥ハ長鳴鷄ホて鷄の篇を略るのゝ本ようり鷄の一名ホれバ此を字ホ況ゝ讀む時ハ水蛭子も美豆比流古と訓むが如し史本集八ホ香山の賢木ゞ木の時鳥常世の鳥の音みや鳴らむと詠るハ此の古事ヲ依れるホれバ長鳴鳥ヲ引合せて唯ホ登理と訓べし と云り

度無差ゝ有ハ記傳ホ云ハるが如く一種然る異物の名ホて並ての鷄を云ホ非ハ寒ホ此と同トからざる○聚ハ阿都米氐ゝ訓り古事記ホハ集字を書り厚群の義ホり通證ホ仇神社有鳥居者蓋据此故事也と云るハ然る事ホり皇太神宮儀式帳ホ謂ゆる於不菅御門の事を和名抄ホ辨色立成云雞栖鳥居也楊氐說同ゝ有り其鳥居ゝ云ふ名ハ其上ホ横ホ架せる木ホ長鳴鳥を居させたる吉例を襲ひて称けたる所ホる可し古事記明宮殿大御歌ホ本都延波登理幸賀良斯ゝ詠ける給へるハ木の上枝ホ鳥の居る事ホ就て続けさせ給へるホハ鳥居ゝ云言の據ホるホ似たり拾遺集物名鳥居を道速振る神の社ホ在ホくホ水上ホも鳥居立ホり」ゝ云ふ続きホ右ホ彷彿たり又通證ホ考類聚雜要抄人家亦有名鳥居者詩曰雞棲於桀爾雅雞棲於弋為樔内匠寮式御腰輿腰車皆有鳥居或以為古外門或以為華表柱皆非ゝ云り今茲ホ鳥居ハ余りホ指過しなるが如して虽も斯る由緒の無て事の事迄を云ハ鳥居ゝ云拙ホ有べき事ホ〜ぬバ事の因ホ云ホり

○僕ホ長鳴ハ古事記ホハ唯ホ今鳴而ゝ有ホり神祇本紀ホハ聚常世長鳴之鳥遣使長鳴遂聚令鳴矣と見元ホるホり続後撰集元慶六年竟宴恵兼命三絃公忠歌ホ常夜ホる鳥の聲ホて磐戸開て光無き世ハ明初

△鳥居と云事源氏榊巻四丁ホ物速ホげホるホ栄を大垣ホて云ゝ黒木の鳥居共ハ流石ホ神〜しく見え渡されて云ゝ詞花誰下ホ稲荷の鳥居ホ書付て侍りけりホと見ゆ

るける又天木集ハ神楽を公朝庭火燒き常世ハ在し
長鳴の鳥の声聞けバ明ぬ此夜ハ」あど詠るも皆此の
故事ハ縁ある者あり偖此ハ雞を令長鳴る事ハ頻ハ
令鳴て日神の磐戸を出させ御在し坐る事を促ぐし
申せるハて自餘の諸神の廣く厚く称辭して祈啓さ
るハハ同じうりぬ可き事あり記傳ハ六十ハ四丁ハ尓天宇
受賣白言益汝命而貴神坐故歡喜咲樂如此言之間天
児屋命布刀玉命指出其鏡示奉天照太御神略と有る
此御鏡を見せ奉れるうるハ日神の御光移りて全等
しく照炫やくを以て汝命ハ勝りて尊き神るハ此御

鏡を申成せる者あり雞を鳴せたるも皆此貴神坐て
世を照し給ふ事日神ハ同トき由を示し奉れる者ハ
り」と云ハたる其ハも然る説あゞる其事を兼て猶促ぐ
し奉れる義ある可きハとろ口訣ハ使立長鳴以常闇世畫夜之慮也と云ひ
又或説ハ日神の光無れども一氣の発る時鳴鳥ありれ
ハ畫夜の別有りて日神の御心を動りさ引れたる為ありと
云るあどハ共ハ非るあり　偖古史第五十四段徵ハ神祇本源ハ古
語云今世号鳥名子長鳴縁也と見えたるハ太神宮式
ハ代三節祭并解斎直會之日鳥名子儛童男童女十八
人装束青摺衣裳在前摺備臨祭給」之料布十二端男二丈八人別
尺廿二丈五尺彈琴二人笛生二人歌長三人料布三端二丈

二年終各給其身〻見え六月に次祭條直會の所に退
就解斎殿給酒食訖入外玉垣門供倭儛中略訖斎宮女孺
四人供五節儛次鳥名子儛と有て鳥名子ハ儛伎の称
あり其歌長ハ雞の長鳴為るが如く詠め謡ふ事ある
が故に鳥名子長鳴とハ云ふ可し其ハ変しき狀ハ建
久行事記同祭條に次自舞姫候殿鳥名子所下部等相
具鳥名子等於斎王候殿與舞姫候殿中間謳歌吹笛又
此職掌人之内二人自四所職掌人之手請取御琴持参
會樂奉仕御歌十二首第一略中以上十二首次第如此畢之
後阿麻能於比阿麻能於比止三度申鳥名子等組手廻

こ後各頭一所聚伏其後起各合手後退出也件職掌人
忌火屋殿御琴上退出也〻見えたる各頭一所聚伏其
後起〻有あぐハ全く長鳴鳥の狀を擬びたる者あり
偖其歌ハ十二首共に甚く古くハ見えざれども其第
一阿米那流夜。夜加理加那加那流夜。和礼比登能古。佐
阿礼杼母夜。こ加理加那良那流夜。和礼比登能古。と有
あぐハ甚く古の狀あり初句ハ天在也あり二句ハ弥
明亮在也あゝむを字の衍たるある可く三句結句ハ
吾兵佗子みて其場に侍ふ群類を云あり四句ハ虽然
有みて右の弥明亮也の反を云む料みて五句の弥明

也と云む為なり但一首の意は天上は明らかなりや
明らかなるやと我人共に日神の出坐ざる事を
危ぶと鳴める鶏の其時の意を云擬べるなり著て其
畢に阿麻能於比と云は天之大日と云事にて上に云
る如く此に雞の長鳴する由は日神の磐戸を出させ御在
し坐む事を頻に催し促がし奉れりし意を取て然
申す例とは成れるなる可し此を以て此に使に長鳴
と有る其本の所縁を想ふ可くなむ有ける故思ふに
は鳥加子の義にて童男童女を長鳴鳥の狀に仕立て
其擬びを令成る謂なる者なり偖行事記に所見たる
其余十一首の歌は遥に後の事も交れるども右に引
るのこは字の誤と所思しきも少無には非れども其

意趣は悉に此に長鳴鳥をして長鳴為しめたる義に
所合て右の如くなるは甚て上れる神代より傳来れ
る者とこそ所思えたれ○手力雄神は古事記に天手力男神と作
り此神の御功下に乃以御手細開磐戸窺之時手力雄神則
奉兼天照大神之手引而奉出と見え古事記にも稍自
戸出而臨坐之時其所隠立之天手力男神取其御手引
出と有り又古語拾遺には聊開戸而窺之爰令天手力
雄神引啓其扉遷座新殿と見えたり然れども倭姫命
世記に天手力男神榜惜千二姫神を御戸開闢神と見
え上代本記に由氣宮御遷座の所に亦天照大神御託
宣相殿坐神二前に由氣宮相殿神皇孫命に奉陪従略

自尓以往以天手力男神萬幡豊秋津姫命天照皇太神
神乃孝相殿神元是号御戸開神也と有て其二柱共に御戸開神
の号有に紀記の趣に違ひて手力雄命一神のみ御在し
坐に漏し給へりし者なり皇太神宮祢宜譜圖帳に天
手力雄命天石門乃左方尓居天乃於須女右方尓居天
常世国長鳴鳥儲豆云と見えたる此に違て上百八十四丁
にも云る如く萬幡姫命天鈿女命一神なる事知るる
こなり若て此第三の一書に乃細開磐戸而窺之是時天
手力雄神侍磐戸側則引開之と見え又神名帳頭書及神
社考に載たる古傳に天手力雄命以其所取石戸拋空

此即落而孝山信濃国戸隠山是也と見えたるに如く
手力雄命に磐戸破る手力以て其御戸を引開て拋給
ひ再日神の隠坐す事勿る可く物為給ふ可きめりば
何れの際の在て天照太神の御手を奉兼りて引出し
奉るむ其御手を取て引出奉るに次く天鈿女命に
御在し坐て謂ゆる榜幡千々姫命の御事にあむ御在
し坐ける故其榜幡千々姫命を神名式ある伊勢国多
氣郡佐那神社二座の中より勸請れりと見
元て同式に阿波国名方郡天石門別八倉比賣神社大
日次新嘗と有を彼国神名帳と云物に今名東郡佐那
河内村に坐と云佐那の地名同じきに全同神なる
るが故あり又神功皇后御紀に於尾田吾田節之淡郡
所居之有也と宣へるに下に雄日女尊誨之曰吾欲居
活田長峽国と有る是に右の阿波国より顕出させ

△を思ふ可く又猶遺ふ天鈿女命を其神強悍猛固故以為名今俗強女謂之於御志此縁也と見え又古事記御天降段ふ記天宇受賣命次者至手弱女共伊牟迦布神面勝神など有る趣も合せて天石門別と申す御名の定まらざる事を

給へるあり若て国式ふ山城国葛野郡天津石門別稚姫神社名神大月次新嘗と有て右の如く天石門別と也天津石門別とも御名の上ふ冠ふくせ奉れるを以て天手力雄命と共ふ石門別の御功御在し坐し御事曉る可あり此ふ手力雄神の御事を申さむハ要無きふ似たりと雖も此神と二柱を合せて御戸開神と申す御事を然れば手力雄神と申すハ思兼神ふ對ふが如き御名ありけり其ハ第一一書ふ彼神の御事を有思慮之智と有が如く智謀を以て御功の御在し坐るを此神ハ右ふ云るが如く石門破る手力の御在し坐が故ふ然御名ふも負せさせ御在し坐るふが有ける是心を以て労づくと力を以て働くとの差異ある者あり万葉三四十五十ふ豊国乃鏡

△清神奥儀抄三ハふ右の歌を引て云く此ハ手力雄神を詠り天照大神の石門を開て覗き給ひし時戸の本ふ立て石門を引塞きたりしか神ふりと見えたり

山之石戸立隠尓計良思云この歌ふ並びて石戸破手力毛欲得手弱女有者為便乃不知苦と有も此の故事ふ依て詠ひたる事己ふ上百二十六丁ふ註るが如し又十七四十二丁ふ手里底加射佐武多治可良毛我世母又二十七丁伊尼多ニ武知加良手奈美等ふど有ハ手力又ハ力と云事の例あり古事記平国段ふ千引石擎手末而来言誰来我国而忍ニ如此物言然欲為力競と有も手力を頼もて挑ニ(イド)ニ(ニ)爭ふあり垂仁天皇七年御紀ふ當麻邑有勇悍(悍)士曰當麻蹶速其為人也彊(強)力以能毀角申鉤又景行天皇二年御紀ふ日本武尊幼有雄略之氣及壮容貌

魁儁身長一丈力能扛鼎為めに見えたるハ何れも人
ゐして手力強うゐしあり況て石戸破る神う雄略し
き手力ハ如何計う御在し坐てけむ神名式ゐ伊豆国
田方郡引手力命神社と有も磐戸を引開給へるゐ因
れる御名ゐ名めり今賀茂郡十足村手力雄山ゐ坐と云
り又紀伊国牟婁郡天手力男神社有り猶此神の出自
又天石戸別神と申す所以等ハ下四百ハ十三丁ゐ委しく云
てむを考合す可き者ゐり又戸隠神を申奉る由来を
通證ゐ力筋幹也と云ゐり然も其所ゐて説べきゐり偖
の活機を成すハ事筋力の預る所ゐれども有ゐむう身体
ゐ筋力陸詞切韻云筋和名須知骨筋字从肉力也周礼
注云力ハ筋骸之強者也て有り須知ハ進血ゐて謂ゆる

公名義抄ゐ力之知加良又都登年又久登那流などの訓有り

経絡の事ゐ委しくハ蒙三ノ一書
興台産霊神の傳ゐ云を見る可し○磐戸之側ハ蒙
三ノ一書ゐ是時天手力雄神侍磐戸側と有り古事記ゐ
ハ唯ゐ戸掖と見えたるを此ゐハ委しく云るゐり側
字を此ゐ登知伎と訓たるハ右の戸掖ゐ據れるゐ〳〵
む然れ上ゐ己ゐ磐戸と云るうハ和伎と訓むゐむ
目易うゐぬ可き右の掖字ハ其玉垣宮段ゐ那良
戸大坂戸の事を云て唯木戸是腋戸之吉戸ト而出行
之と有る此ハ亟路ゐ非ず傍径の事を云るか其腋ゐ
同じく傍ゐる義ゐり然るゐ職員令左衛士府義解ゐ
謂掖者正門傍之小門也と有れども磐戸ゐ然る掖門

（皇極天皇四年御紀ノ中大兄即位執長槍隱於殿側ト云語有リ此ニ似タリ）

ハ素より無き筈の事なれば其も戸側（トノカタハラ）の義なるなり
下ノ天鈿女命云ニ立（於）天石窟之前巧作俳優ト有るが
抱ての事ハ如何ゐもして日神の御心ゐ留る可く磐
戸の正面ゐて物為し居たるを此手力雄神ハ御戸を
引開ゐて其細めゐ開て窺給ハゐ事を待伺給ふ
なれば其戸の傍なる所ゐ隱立し御在し坐けるなり
和名抄ゐ腋又脇字を知伎と訓るゐ又脇を加太波良
と有をも思ふ可し　名義抄ゐ側を加多波良又保登理
又加久流又加多夫久又曾婆陀都又曾婆年又保能加尓
我流又都多布又須美あど有り　○立ハ本ゐ加久志
多氐ニと訓ミ第三ノ一書なる侍（ニ）磐戸側（ニ）て有を加久志

佐夫良比と訓るハ古事記ゐ隱立戸掖（ニ）て有ゐ依れる
訓なる事云も更なり然れども思兼神の思慮ゐ依り
高皇産霊尊の御命以て令立るなるべしと加久志多
氐とても云め此正書ハ其を省ハて手力雄神の自
隱立して（待伺給ふ）所なれば記傳八四十九丁ゐ隱立ハ加久理多知
氐と謂（訓）べしと云れたる如く訓べき所ゐて有なり其
所ゐ引れたる古事記沼河日賣歌ゐ阿遠夜麻迩比賀
迦久良婆顯宗天皇二年御紀大御歌ゐ弥野磨我俣利
底弥曳傷磐謨阿　羅年推古天皇二十年御紀歌ゐ和
餓於明者弥能訶句理摩須又万葉二二十八丁ゐ烏玉之夜

△此例共八傳三十卷九百十丁ノ學

渡日之隱良久惜乎あゞ有り右ハ人麻呂主の歌ある加久良年加久理加久流と云歟が其頃ゟ猶右の如くの話ゟて有ける者と見ゆめり備古事記ゟハ右の如く隱立戸掖て立て下ゟ稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天手力男神取其御手引出と有り然れば此ゟハ隱の言甚ゟむ重ゟりければ此の立ゟも次ある侍ゟも其言を訓添るゟむ要ゟ理ある事ゟりける故纂疏ゟ手力雄神以其膂力故使之立戸側伺隙而拓開之と説せ給へるゟり皇極天皇四年御紀ゟ中大兄奪彼鞍作入鹿を誅給ふ所ゟ即自執長槍隱於殿側と見えたる此ハ事ハ異ゟれども其隙を伺ひて顯出むと為給へるゟれば其趣ハ此ゟ似たる事ゟりて甚可畏き引事ゟあるむ

△謂ゆる行事部事已ゟ傳四十七丁ゟあるが如し

り下ゟ中臣神忌部神と有る如きハ職の中臣ゟあるゟて其差別有る事ゟり第二ノ書ゟハ中臣遠祖天兒屋命第三ノ書ゟハ中臣連遠祖興台産靈兒天兒屋命と見え天孫降臨章第一ノ一書五部神の中ゟ中臣上祖天兒屋命と書し古事記御天降段ゟも故其天兒屋命者中臣連等之祖と有る是ゟり古語拾遺ゟ神皇産靈神の御名の出なる下ゟ此神子天兒屋命中臣朝臣祖と出なるゟり姓氏録左京神別ゟ大中臣朝臣藤原朝臣同祖ゟ天神と有て其先ゟ藤原朝臣出自津速魂命三世孫天兒屋根命也下略と所見なり但中臣ハ藤原の舊姓ゟるゟ藤原を主として大中臣を其次ゟ

ムー猶下三百六丁ノ云ヲ合セ見ル可

置く事古義ハ違ひて如何なる事なるか天智天皇八年御紀ハ冬十月丙午朔庚申天皇遣太皇弟於藤原内大臣家授大織冠與大臣位仍賜姓為藤原氏自此以後通曰藤原大臣と見えたれば中臣の舊号を止て藤原氏ハ成さるしなり然るハ文武天皇御紀ハ大宝二年八月戊子朔丙午記曰藤原朝臣所賜之姓宜令其子不比等兼之但意美麻呂等者縁供神事宜復舊姓焉と見えたる意美麻呂ハ天武天皇持統天皇御紀ハ中臣麻呂と作る人の事なり此御時より朝政ハ仕奉る不比等公の一類を藤原氏と云ひ神事ハ仕奉る意美麻呂の一族を中臣氏と云ハ成て自然ハ有なる可し 記傳十五五十五丁

嫡と庶との別有ハ故ハ然ハ中臣ハ万葉十七五十五丁造酒歌ハ奈加等美乃敷乃能里等其等伊比波良信又神楽酒殿歌ハ也戸久乍能奈可奈留久乍乃奈加止三乃と有ハ依て那加登美と訓べく名義ハ中執臣なり其由ハ内親王奉入時詞ハ

皇御孫之尊ヲ天地日月ト共ニ堅石ニ平久安久御座坐志米武等御杖代ト進給布御命ヲ大中臣茂桙中取持ち恐美恐美モ申給久止申延喜奏覧中臣本系帳ハ按依ル天平宝字五年撰氏族志所之宣勘造所進本系帳云高天原初而皇神之御中皇御孫之御中執持伊賀志桙不顧本末中良布留人称之中臣者復舊之由惟其義也大曾會中臣壽詞ハ與天地日月共照志明良志御坐事仁本末不顧茂槍乃中執侍豆奉仕留中臣ゑど有る如く祖神天児屋命よりして神と君との御中を執持て申す職なる申なり茂桙中取持と云ハ桙柄の眞中を首

△宮衛令即埴委聞の義解に謂執申之義を有る是なり

尾を傾ぶけず正しく平らに執持を以て神と君との御中に立て宣しき奴に執持申すを辱へたるなり△舒明天皇御紀に薨亦大臣所遣群卿者従来如嚴子嚴子此云伊箇之保虚取中事而奏請人等也故能宣白叔父と有も中臣に非ぬと事に同ト是古語と聞えたり中を取と職員令大納言義解に納下言於上宣上言於下也と有と同ト意味にて諸の祝詞などを申すに君の御言を神に納るなり大占のト事を掌どるに神の御言を君に宣申すなり是皆中臣の職にして書紀に天児屋命主神事之宗源者也故偏以太占之ト事而奉仕焉と

△又金木と云に

と有が如し偖諸の姓氏に職業を取ると地名に依るると祖名を取るると又事を取り物を取るなどの種に有る中に此中臣連なども職業に因る姓氏なり補意と云るに聞えたり猶鎌足公傳に其先出自天児屋根命世掌天地之祭相和人神仍命其氏曰中臣と有に上に引る意を漢文に書せるにて其に同じく中臣の名義を徴せる者なり右に引る嚴子取子立地之時必取其中改云と有に如何大祓詞に大中臣天津金木乎本打切末打断氏と有る纏きに依て考るに嚴子と云に年中行事秘抄に見えたる鎮魂歌に金子木子と云る中の木子の事にて其嚴の伊に発語箇之に木名なり即擅る由已に傳十巻百九十七丁に註るが如し若て其金木に商明天皇六年御紀に兵

盡前役以梧戰と有る梧を那加那紀と訓るか極金木
と云事ハて手ハ反持て戦あど為る令世の棒の事ハ
り備其棒の製様ハ権衡の如く本末共に均しく差平
れるが故ハ其中分を取れば本末ハ軽重の無きことハ
ハ相傾うざるを以て譬ハ取れるあり故此磐戸隠の時の御祈ハ始て此
天児屋命ハしも其事を事と主り給ひし故ハ此下ハ
御名ハ指ずして唯ハ其職掌を以て中臣神と出なる
も著く第二ノ一書ハ天児屋命則以神祝祝之第三ノ一書
ハ諸神遣中臣連遠祖興台産靈児天児屋命而使祈焉
於是天児屋命中略廣厚称辞祈啓矣と有ハ此ハ聚へる
八百萬神と日神との御中を取持して祈啓させ給へ
るあり又此時の御事を古事記ハ内に投天香山之眞男

鹿之肩抜而取天香山之天波に迦而令占合麻迦那波
而云こと有ハ諸神等の儲備なる物事の可否を日神
より奉いるあて此亦御中を取持せるあり又第三ノ一
書ハ乃使天児屋命掌其解除之太詞辞而宣之と有ハ
解除を科する素戔嗚尊と罪織を被ふ被戸神との御
中を取持給へるあり又天孫降臨章第二ノ一書ハ且天
児屋命主神事之宗源者也故俾以太占之卜事而奉仕
焉と有ハ皇御孫尊の御手代として神を令祭給ふ所
の文あるが神事之宗源と有ハ神祭の事ハハ非ず上百七十四
ハ云るが如く此ハ思兼神と同神ハして深遠謀慮

の御在し坐神あるが故わ在ゆる神祇の情態を知給
ふ神わ在して能其根本を明らむる謂ある事無仁天
皇二十五年御紀ある倭大神の御言わ亟祭祀神祇微
細来探其源根と有る源根を探る爲る太占すト事を
以て仕奉給へるわて此即神と君との御中を執持給
ふ謂あり又儀式九月十一日奉伊勢太神宮幣儀わ勅
中臣参来中臣祢唯升殿跪侍勅好申天奉礼中臣祢唯
復版と見えたる此好申天奉礼ハ右わ謂ゆる御中取
持申せと使の中臣わ勅給へるあり若て其神嘗祭詞
わ大中臣太玉串を隠侍天今年九月十七日朝日豊栄

登を天津祝詞乃太祝詞辞を祢申事を云こと有る此
わて其御命遍たず皇御孫尊の御中と皇太神の御中
を本末傾けず取持奉れる者あり又右わ引る中臣壽
詞ハ天神の壽詞あるを天皇の踐祚大嘗祭の時わ當
りて奏す事わて其ハ天神より天皇わ言壽宣ふ御言
を中臣の家わ傳へて奏すが故わ天都神乃壽詞遠祢
辞定奉留云こ典天地日月共照志明良御坐事仁本末
不傾茂槍乃中執持豆奉仕留中臣祭主云こ壽詞遠祢
辞定奉久申と、有るハけり又続紀わ元正天皇靈亀
二年二月丁巳出雲国と造外正七位上出雲臣果安爾竟奏神賀事神祇大副中
臣朝臣人足以其詞奏聞と有が如く神賀詞を天皇の

大前に奏すれも中臣の取傳へ奏すあるい彼中取持
つ謂ある事云と更あり備通證に中臣中津臣之轉語
と云るハ誤あり中執臣あらでい右に引る證共に合
ざるあり又記傳に或人孝德天皇御紀に上臣下臣と
云事有りハ其に對へたる中臣あり又大臣小臣に對
へたる称あり云るも皆非あり」と云れなるい實
に然る言あり又其中執臣の猶證とも成べきい
に執異姓之交謀以令成夫婦之倫者曰媒と云る媒ハ
仲立と云事にて兩方の其間に立て計らふ由あり此
に依て仲人とも云り又俗に灼取の女を仲居と云ふ
ど皆共に其例あり　又中臣氏ハ神代より以来天皇の御前の事
取持て申給ふ事　藤原氏に至りても今に異あら
ざるハ君臣の間にて中執持給へるあり其始古事記
御天降段ある天照太御神の大御命に次思金神者取
持前事為政と有ハ上百七十七丁にも云るが如く其に

太玉神の御名の漏給へるあるが　天孫降臨章第
二一書に天照太神復勅天児屋命太玉命惟尔二神亦
同侍殿内善為防護と有る是あり此時ハ神と君と同
床共殿に御在し坐ければ彼此を別たず仕奉給ひし
あり然るに皇太神ハ御璽寶あり皇御孫尊ハ現人神
あり此時より始て神と君とに仕奉るに其差別無し
とハ云べからず故現人神に仕奉る狀ハ左右の大臣
の如く有けむ事云も更あり故其前事とハ上より下
に宣り下より上に奏す如き御前の御政あり取持ハ
其補佐と為て仕奉るを云あり記傳十五二十九丁に明宮

段詔ハ大雅命執食国之政以白賜万葉十七四十三丁ハ於
保伎美乃美許等可之古美ヤ須久尓能許登ニ里毛知
底十八三十丁ハ於保伎見能末伎能末ニ尓ニ等里毛知
底都可布流久尓能三代実録廿九十五丁ハ詔ハ右大臣藤
原朝臣渡内外乃政ヲ取持天勤仕奉已止風夜不懈源語
若菜下巻ハ宮等の御扱ひあど取持て為給ふ狀も
略々霧巻ハ御法事ハ萬取持て為させ給ふあども有
り其事を身ハ負持て執行ふを云ひ今世ハ他の事
を傍より助けて共に為るを取持と云も此より轉れ
るあり右の源氏物語ハ此ハ近し と云れたり又

其政を明宮段ハ依て白賜と同じく訓れたり備
白賜ハ上ハ合する事を奉ハり行ふを云れば右の
取持前事為政ハ皇御孫尊の御前ハて天児屋命の君と臣との御中を執
持して本末傾けずして政でち給ふを云あり故其天
児屋命の神亂二流ハ相分りて藤原氏ハ朝政ハ中臣
氏ハ神事ハ仕奉る事と成れども祭政共ハ一あり し
上古ハハ神事と公事を相兼て仕奉られしうども茂
桙の中執持して本末傾けず仕奉られたる狀ハ相等しうつ
る趣右ハ註せる如くありけ〳〵し 右ハ引る舒明天皇
御紀ハ大臣所遣群卿者従来如厳矛取中事而奏請人也と有ハ上ハ是群
卿言也特非臣心云と惟之不得傳啓乃西日親啓焉爰

群大夫等受大臣之言共詣于班鳩宮使下三国王櫻井臣以大臣之辭啓於山背大兄王と有る其御答あり此ふ執て見るを大臣より所遣れし群卿等ハ媒と成て傳啓ふ者ありと宣へるあり今世ふも他の言を取傳へて言入るを取持為ると云ふ同じく中臣ハ神と君との御中を取持ち君と臣との御中をも執持つ義あれば二方ふ相通ひて愈中執臣の義ある事著明き者あり右ふ引れたる職員令大納言義解ふ納下言於上宣上言於下せと有ハ更あり凡て国政を執と云も上の命令を下ふ傳へ下の言事を上ふ啓すゞ本意ふるをも思合す可し偖天児屋命石神萬幡千々姫命と二柱共ふ日宮の内外ふ然る業を以て仕奉り御在し坐る所由已ふ上百八十五丁ふ云りき此氏の事ハ記傳ふも引れたる神武天皇御紀ふ天種子命是中臣氏之遠祖也と見えて其上ふ侍臣天種子命と有り侍臣とハ右ふ引る天孫降臨章第二ノ一書ふ亦同侍殿内善為防護と有る是ふ

宮衛令義解ふ謂侍臣者次納言侍従中務次輔以上也と有れハ其職掌の意味を含て侍臣と書れたりける者あり

仲哀天皇九年御紀ふ中臣烏賊津連と云人有を

て謂ゆる取持前事為政と云る上臣を云るあり（ふて右ふ云る中執臣）又亦

仁天皇二十五年御紀ふ中臣連遠祖大鹿島等の五大夫ふ詔して先皇云こ礼祭神祇剋己勤身日慎一日是以人民富足天下太平也今常朕世祭祀神祇豈得有怠乎と見え又仰中臣連祖探湯主而卜之誰人以令祭大倭大神即渟名城稚姫命食卜焉と有り又神功皇后御紀ふ皇后選吉日八衢宮親為神主（中略）喚中臣烏賊津使主為審神者（下略）と見えたるを允恭天皇七年御紀ふ一舎人中臣烏賊津使主と有も同じ人ふ〳〵むゞ仲哀天皇より此御世ふ至る迄ふ七御代ふ仕奉れる高年人

ムヽ云人有て物部大連尾輿と共に同奏曰我国家之主天下者恒以天地社稷百八十神春夏秋冬祭拜為事方今改拜蕃神恐致国神之怪と見え又敏達天皇御紀に見えたる中臣勝海大夫を

みあむ有ける欽明天皇十三年御紀に中臣連鎌子と用明天皇二年御紀に中臣勝海連と　有て物部守屋大連と共に違詔議曰何皆国神敬佗神也あゞ有て此人　に氏の中にも殊に神と君との御為に功有し人等に坐り又舒明天皇御紀に中臣連弥氣と云人見えたる此等の人々何れも連の姓あるに（右の島賊津連の事に）此中臣に職の中臣あるに非で氏を賜ひて中臣連にはに任し給へるにて姓氏録河内国神別天神に中臣連天児屋根命十一世孫雷大臣命之後也と有る是なり然れば記傳十五五十六丁に中臣島賊津連の中臣に未姓に非で唯職を云

うとも聞ゆれども右の仲哀天皇御紀に四人の名を連ね挙たる餘の三人も皆姓を挙たれば此も姓あり」と云れたる要に然る言にて中臣連姓に其島賊津使主あむ始めに所見たりける此人の事光仁天皇御紀天應元年七月の所に伊賀都臣是中臣遠祖天御中主命二十世孫意美佐夜麻之子也と見えたり此世数の事傳二十二巻興台産靈命の傳に就て云べし備記傳に中臣連の事本系帳に常磐大連公欽明天皇御代始賜中臣連と有れども然れに非で其御紀に中臣連鎌子と云人名見えたり」と云れたるに然る言あり或説に部氏系本に此常磐大連公改ト部姓賜中臣氏と云ふ偽説有れば後に挽入せし者なるべむ此人名に敏達天皇十四年御紀に中臣磐余連と云人名有り似たる事なれば此人を誤りつゝむと云り　備皇極天皇三年御紀に以中臣鎌子連拜神祇伯と見えたるを天智天

皇八年御紀に冬十月丙午朔庚申天皇遣東宮太皇弟於藤原内大臣家授大織冠共大臣位仍賜姓為藤原氏自此以後通曰藤原大臣と見えたる此即鎌足公の事あるが記傳に云れたる如く此時未大臣位をも藤原氏をも賜はぬ以前に藤原内大臣と有はあやまりなるべし然思ふに其は後を前に廻らして注されたる者にして斯る例猶多き事なり又此時に藤原と云氏を賜へりしは此人一人のみと所思しくて此後も右大臣中臣金連なども云人有り」と云れたるは然る事にて鎌足公の一家は居地に依て藤原氏を賜へるにこそ有けれ其より以前に別れたりし家とは猶其行事に因て中臣連と云けむは然も有ぬ可き事にて其鎌足公の正嫡不比等公のみは何れにも藤原と有て其餘は中臣藤原相通はして称る如くあるは藤原の居地に在ざるは猶中臣の行事に依て自然に其旧を守り居べき事にあむ有ける故天武天皇十年御紀三月に令」記定帝紀及上古諸事と有る人の中に大山上中臣連大島と云有を同十四年九月に（見元朱鳥元年正月九月の所にも然）大島朝臣と有り然るに持統天皇四年御紀正月に神祇伯中臣大島朝臣読天神寿詞と有て此は神事に依ては中臣と云ひ餘

事ハ藤原と云る狀ハ聞ゆれども又然のことハ非
ずと見えて朱鳥元年十月の所又持統天皇三年二月
ハ中臣臣麻呂と有ハ朝臣の姓を脱したれども共ハ
中臣なるを其七年三月ハ葛原朝臣臣麻呂と有れば
相通ハ一称るハころ然るハ中臣本系帳糠手子大連
條ハ御食子大連公男ハ錦子中臣朝臣足目国子大連
公孫中臣朝臣意美麻呂中臣朝臣大島等被編御食子
大連公長子大織冠内大臣鎌足大連公之列同賜藤原
朝臣姓訖而経二十九箇年文武天皇戊戌年八月丙午
詔曰藤原朝臣所賜之姓宜令其子不比等義之但意美

麻呂等縁供神事宜復舊姓と有る此文武天皇戊戌よ
り逆ハ数ふれハ其二十九箇年以前ハ即天智天皇の
御代ハ當れば右ハ引る御紀ハ賜姓爲藤原氏と有
る時ハ其嫡家庶流共ハ同ト く藤原氏ハ被成たるハ
りけり然れども鎌足公ハしも其大和国高市郡ある
藤原の地ハ御在しければ其居地ハ因て賞ハ
藤原氏なる可けれども右の臣麻呂大島等の人とハ
其地居所て云ハも非りけるし此を以て其中執臣て
云ふ行事の方ハ就て多くハ中臣氏を名乗けむうら
右ハ見えたる如く不比等公のと此を兼続しめ給ふ
可き御定ハ出たりける者ハゆゑ記傳ハ藤原と云
ハ唯称号と云物の如くハて正しく姓ハも非りけむ
故ハ猶中臣朝臣とも云しある可し云て藤原ハ別号
の如くありしと聞ゆ云れたるハ委しうず備其
居地て行事ての事を因ハ云べし続紀延暦九年十一
月の所ハ外従五位下韓国連源等言己等是物部大連

等之苗裔也夫物部連等各居地行事別存百八十氏
是以源等鹽児以父祖奉使国名故改物部連存韓国連
然則大連苗裔是日本旧民氏今号韓国還似三韓之新来
至於唱導毎驚人聽因地賜姓古今通典伏望改韓国二字
字中蒙賜高原依請許之之見元たる韓国連ハ使を奉り
て行たる国名ハ依て負るハて即行事あり次高屋連
云ハ今住る所名ハ依て改たるハて即居地あり右ハて藤
原元居地ハ依て云ひ中臣ハ行事を以て云て其職名
ある事を
暁る可し此ハ姓氏録左京神別ハ藤原朝臣出自津速
上天神
魂命三世孫天児屋根命也二十三世孫内大臣大織冠
中臣連鎌子古紀記曰鎌足天命開別天皇諡天智八年賜藤原氏
男正一位贈大政大臣不比等天渟中原瀛真人天皇諡天武
十三年賜朝臣姓々有り然るハ御紀ハ十三年十一
月戊申朔中臣連賜姓曰朝臣々有て藤原連賜姓曰朝

臣々云事の無ハ依て記傳ハ天武天皇の御世ハ朝臣
の姓を賜へるハ中臣連あれば不比等公も正しき姓
ハ猶中臣ありけむ」々云れたる如く鎌足公ハ藤原氏
を賜ひて後不比等公ハ至りて神事ハ就たる中臣の
職を際こしく停止られたるハも有べうらざれば藤
原氏々ハ称うれ（部ハ籠りて）あらう猶其中臣氏の群ありしか故
ハ中臣の等しく朝臣の姓ハ賜へりけむと所思え
たる右ハ引る皇極天皇御紀ハ以中臣鎌子連幷神祇
伯々見え鎌足公傳ハ世掌天地之祭相和人神と有を
以ても不比等公ハも猶中臣の職掌ハ其家の行事ハ

れハ傳持れけむ事推量られたり文武天皇二年御紀
ハ八月戊子朔丙午詔曰藤原朝臣所賜之姓宜令其子
不比等兼之但意美麻呂等者緣供神事宜復舊姓焉と
有ハ右の本系帳ハ文武天皇戊戌年と出たる是ありて
此詔の狀を思ふハ上ハも云る如く嬪虔共ハ同族の
緣を以て同じく藤原と称りけるを此より不比等公
のみ藤原の氏を兼て自餘ハ舊ハ復し給へるハて藤
原の一家ハて神事ハ預らず唯朝政のみハ仕奉る事
と成れるハ是其始なるむ所見たりける其ハ意美麻
呂ハ緣供神事と有ハ不比等公ハ緣預朝政と云ハ異

あらざるを思ふ可き者ありうし若て文武天皇元年
藤原宮子娘為夫人と有を神亀元年聖武天皇受禪を
云所ハ母曰藤原夫人贈太政大臣不比等之女也と見
えぬ不比等公ハ四子有を天平九年七月の所ハ勅云
太政大臣不比等之第一子也と云ひ同四月ハ参議民
部卿正三位藤原朝臣房前薨云ニ房前贈太政大臣正
一位不比等之第二子也と見え同八月ハ参議式部卿
兼大宰帥正三位藤原朝臣宇合薨贈太政大臣不比等
之第三子也と有り同七月ハ参議兵部卿従三位藤
原朝臣麻呂薨贈太政大臣不比等之第四子也と記さ
れたり如此く其始不比等公一人ハ其藤原氏を兼給へ
るあれども其四子各其氏を兼たるが弘こりて甚多
く成れるあり公事根源ハ藤原氏も南家北家式家京
家として四家ハ別れたりしうども三家ハ絶果て北家
のみ栄えぬる云て有が如く四門と成れる南家ハ
武智麻呂公の後あり北家ハ房前卿式家ハ宇合卿京
家ハ麻呂卿の後あるが其中ハ房前卿の子眞楯其子
内麻呂公を長岡大臣と申し其子閑院贈太政大臣冬

嗣公其子太政大臣従一位良房公と続きて今堂上諸家の藤原氏ハ何れも此ハ出たるを以て北家のこと栄えぬるとハ註されたる者あり其時より判然ハ皇御孫尊の御前の事を執持て白賜ふ藤原氏と皇神の御中皇御孫尊の御中執持て茂梓の本末傾けず仕奉らるゝ中臣氏各相別れたりける上百九十八丁ハ引る本系帳ハ復旧之由惟其義也と云る是なり然れば右の意美麻呂等者縁供神事宜復旧姓と有ハ藤原の新号を改め中臣の旧氏ハ復る可き由の大御詔ハ御在し坐す事申すも更なり元明天皇御紀ハ和銅元年三月丙午以従四位上中臣朝臣意美麻呂為神祇伯と有て同日中納言を令

兼給へる事所見なり称徳天皇御紀ハ景雲三年六月乙卯詔因神語有言大中臣而中臣朝臣清麻呂両度任神祇官供奉無失是以賜姓大中臣朝臣と有る神語ハ大祓詞ハ天津宮事以白大中臣天津金木子云ニと見えたる是なるゞ祝詞考ハ大とハ惣て天皇の大御事ハ係れるをば大某と云例ハて御巫も神祇官なるをば大御巫と云ハ同トく並ての中臣ハハ非て神祇官ハ―て直ハ神と君との御中を執申すゞ故ハ大中臣とハ云るハて古大御政を掌れる人の連の姓なるをば大連臣の姓なるをば大臣なゞと云ふ大ハ似たり但

大連大臣ハ姓ヲ就テ云ヒ大中臣ハ職ヲ就テ云ふを
右の詔有て後ハ氏を大中臣と云ふ事と成れり取意と
云ひたるが如し 偖又延暦七年御紀ヲ出たる其清麻
呂公 傳ヲ曾祖国子ハ、治田朝、小徳冠父意美麻呂、中
納言正四位上清麻呂略中宝字中至従四位上参議左大
辨兼神祇伯歴居顕要見称勤恪神護元年略中高野天皇
更行大嘗之事清麻呂時為神祇伯供奉其事天皇嘉其
累仕神祇官清慎自守特授従三位景雲二年拜中納言
優詔賜姓大中臣朝臣天宗高紹天皇踐祚授正三位轉
大納言兼東宮傅宝亀二年拜右大臣授従二位尋加正

○録

然るに東大寺要録等六大中臣事の下に姓氏録等十二神護景雲三年左大臣中臣朝臣清麻呂四賜大字厥後延歴十六年定成等四十八同賜大字同十七年弘長寺三十七加賜大字自餘猶留存中臣朝臣と有る十一巻ハ其ハ左京神別の所あるに今ハ右の文所見ざるハ脱たるあるべし此定成弘長等ハ右の清麻呂公の族あるべしと

二位清麻呂歴事数朝為国旧老朝儀国典多所諳練略下
と有を以考るに此清麻呂公の多くの中臣の中より擢出て大中臣氏に被成たる故に其子孫に至りて
然称ふ事と成れるあり姓氏録左京神別上天神に大中臣
朝臣藤原朝臣同祖と有も當昔其一家に限りたりし
事と所見なり 右の清麻呂公の曾祖小徳冠国子ハ本系帳に国子大連公と有る人なり其子
国足大連公と云ふハ意美麻呂卿の父にて清麻呂公
ハ祖父に當れるを右に曾祖と父とを云て祖父
の名漏れたり此よりして清麻呂公の子孫の人等何
れも大中臣朝臣と称る事にて他の中臣氏とハ混れ
ざる事ハ然れども然大字を加へて賜ふ以前
成るなり
に右の意美麻呂卿の一家ハ諸の中臣氏の中に獨

立てゞ有けゝし続紀を見豆すれ中臣朝臣兼又中臣
某と云も多く出たれども位昇〳〵官賤〳〵く有て右と
ハ相並ばざるハ又其庶流の中臣なる可し又中臣志
斐連中臣習宜朝臣中臣熊凝朝臣中臣宮處連中臣殖栗
連中臣小殿連中臣鹿島連中臣九連中臣伊勢連中臣
葛野連中臣殿来連中臣酒人宿祢中臣栗原連と有ま
どハ同じく中臣の部なれハ有れども多くハ其居地の名
を添て云ふ者なれ壁べハ中臣鹿島連中臣伊勢連と
云ふ如きハ鹿島に居る中臣連伊勢に住る中臣連な
ど云ふ異なゝず故姓氏録を見るに其左京神別に先

大中臣朝臣藤原朝臣同祖と挙て其次に中臣酒人宿
祢伊香津連中臣宮處連中臣方岳連中臣志斐連殖栗
連大家連と右七氏を署して下に何れも大中臣同祖
と有り其大和国に大家臣大中臣朝臣同祖と有り攝
津国に津島朝臣椋垣朝臣荒城朝臣を大中臣朝臣同
祖と見え次なる中臣東連神奴連中臣藍連中臣大田
連生田首と有る五氏も其同族なり河内国に菅生朝
臣大中臣朝臣同祖と有を始として次に中臣連中臣
酒屋連村山連中臣高良比連平岡連川跨連中臣連中
臣なゞ有り和泉国に宮處朝臣大中臣朝臣同祖と有

て次に狭山連和太連志斐連蜂田連殿来　連大鳥連
中臣部氏並評連畝尾連中臣表連と有る各下に同上
と註されたり此宮處朝臣殿来連などい右の續紀に
中臣宮處連中臣殿来連と有る此るを以て考るに
其左京神別より以下に中臣某と云ざるも悉く俱に
中臣の部あるに依て共に中臣氏にていい有れども各居
地の名を以て宮處朝臣殿来連などい略き云習ハしな
るに有むに有ける但右等の中臣ハ何れも主とせき際
に非ずして儀式又延喜式などに中臣何人と云て
役たると是あり職員令に神祇官に神部三十人と有

るに古語拾遺に神祇官神部可有中臣齋部猿女鏡
作盾作神服倭文麻続等氏而今唯有中臣齋部等二三
氏自餘諸氏不預考選と見えたり然るに四時祭式祈
年祭條に若曹内無忌部官人及神部之中忌部不足九
人者兼取諸司充之と有る文に就て考るに神部三十
人と云れども大抵ハ中臣氏の多在りし趣なる
事著明なるむ所見たりける但右に引る続紀の中臣
習宜朝臣中臣小殿連中臣丸連の
中臣葛野連の三ハ異姓なり中臣
二氏ハ姓氏録に見えず備続紀に養老三年五月癸卯
従八位下中臣習宜連笠麻呂等四人従六位上中臣
熊凝連古麻呂等七人並賜朝臣姓と有るに姓氏録
右京神別上に中臣習宜朝臣神饒連日命孫味瓊杵田
命之後也又中臣熊凝朝臣同上と見えたれハ此二氏

宣政文庫
同書
消印
文庫

共に上に謂ゆる大中臣朝臣同祖なるを別あり故
天平十七年八月の下に従五位下中臣熊凝朝臣百島
除中臣為熊凝朝臣と有て中臣を除き熊凝朝臣と有し事
なるも姓氏録に其後弘仁六年に奏上せられ
物あるに猶中臣熊凝朝臣と有は除難き故由の
有けるに又山城国神別に中臣葛野連饒速日命
九世孫伊久比足尼之後也と有り然るに其も続紀に
天平二十年秋七月戊寅正六位下中臣部子稲麻呂賜
臣葛野連姓を有り饒速日命の子孫にして正しく
思ふに右の三氏は中臣部と云しあり
故物部氏の所属なる中臣氏を以て充るは足ざめし故
の事とよ
十の人を有れども中臣氏を以て祓使たりし
支族は未世に廣くも非りしかば神祇官の神部三代
の中臣某と云ふ事は當昔中臣氏
殿り外に考ふ可き便無く
連姓氏録に未得ずと雖も中臣
朝臣大春日朝臣和尔臣同部祖を連の
皇別に押人命世と見えたる部を有
迹部朝臣と作る自例孝昭
天皇子天帯彦国押人命世と見えたる部を有
定雑姓右京皇別和迹部朝臣と作る自例孝昭
右京皇別和迹部朝臣と作る自例孝昭
中臣に觀松彦香殖稲天皇謚孝昭
皇子

国立公文書館
National Archives of Japan